

この世界にドラクエは
ない

トツシー

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

神様転生と特典なんて無いと思ってたら実は…、そんなオリ主は第二の人生において大好きなゲームの世界にトリップしてしまう。やっとの思いで戻ってきてみるとその世界も実はファンタジーだった。異世界帰還を経験したオリ主の強くてニューゲームな話です。

目次

L e v e l : 9	L e v e l : 8	L e v e l : 7	L e v e l : 6	L e v e l : 5	L e v e l : 4	L e v e l : 3	L e v e l : 2	L e v e l : 1
154	130	108	92	73	56	41	22	1

Level : 1

—なあ、ドラクエって知ってるか？

なにそれ？何の略？

ねえねえ、ドラゴンクエストって知ってる？

はあ？聞いたこと無いけど…。

ゲームだよ。ロープレ。RPG。

……知らん、もしかしてドラゴン・ストーリーと勘違いしてる？

……へ？ドラゴンストーリー？

ばっか、知らねえの？ドラストだって。

エニ〇クス？

いや『えにくす』。おまえ間違えて覚えてんの？だっせえ…。

四文字デフォルトネーム？

なんだそれ？

この世界にはドラゴンクエストは無い。

スク〇アもエニツ〇スもスク〇ニも存在しなかった…。

嗚呼、ドラクエがしたい…。

俺は目の前の画面に映るTVゲーム。

ドラゴンストーリー、略して『ドラスト』の戦闘画面を見て溜息を付いた。

どうしてこの世界にはドラゴンクエストが無いんだ。
こんなのパチモノだ。

友人とゲームの話で盛り上がれない。

ドラストは良いゲームだとは思う。

ドラクエさえ知ってなければ俺もパチモノ扱いせずに楽しめただろう。

しかし、どうしてもドラクエと被ってしまい萎えるのだ。

もうお分かりと思うがオレ、転生者つす。

因みに神様には会いませんでした。

新たな世界は現代日本。勿論リリカルマジカルも奇妙な冒険も学園都市も有りませ
ん。

内心ホツとしています。

神様特典のチートもないのに殺伐とした世界には行きたくないです。

平和そうな普通な世界で良かった。

前世と同じ両親や環境に喜びを感じ、人生をやり直せる喜びと期待に胸を膨らませ
る。

「けど、どうしてこの世界にはドラゴンクエストが存在しないんだああつ!!!
!!!」

「ケンちゃん五月蠅い」

オレの叫びは、今世のオカンの一撃によって止められてしまう。

嗚呼、神様特典くれないなら、せめてドラクエがしたかった。

オレは友人から借りていた『ドラスト』をカバンに入れる。

今日は返す約束をしていた日だ。

思えばこれが分岐点だったのだろう。

こういうのをテンプレというのだろうか？

交差点に差し掛かった所で暴走した大型トラックが物凄い勢いで迫ってくる。

トラックの動きはスローモーションのように感じられノロノロとしたものだが、不思議

と足が動かない。

その所為か、酔っ払った運転手の間抜けな顔がはつきりと認識できた。

そして凄まじい衝撃とともに視界が真っ白になった…。

その日オレは、再び短い人生を終える事になったのであった。

嗚呼、最後にもう一度ドラクエがやりたかった。

遅ればせながら、その願い叶えてやろう…。

最後にそんな声が聞こえた気がした。

ピキーツ

そうそう、こんな感じでスライムがあらわれたって感じで！

やっぱり初戦闘はスライムが……え？

スライム？本物？

目の前の水色のプルプルしたのは紛れもないドラクエの皆勤賞。

「いじめないで、ぼく悪いスライムじゃないよ」とつぶらな瞳が訴えているように感じられる。

ピキーツ

「いでっ!!?」

体当りされた。

めっちゃ痛い。普通にぶん殴られるより痛い。

こいつ、悪いスライムだった。

神様特典、有りました。

でも神様、オレがやりたいのはテレビ画面の前でゲームがやりたいのであって、
「実際に冒険したいわけじゃねええええつ!!!」

オレはあまりの痛みに混乱しながらスライムから背を向けて全力で走りだした。

平塚剣、アダ名は『ケンちゃん』。

リアル中二真っ盛り。

神様特典はドラゴンクエストの世界にトリップだった。

この世界にドラクエはない

ぷろろーぐ

—大丈夫？怪我はない？

あ、ありがとう…、助かったよ…。

キミ、こんな所で武器も持たずに一人旅なんて自殺志願者なの？

い、いや…オ、オレは…。

混乱してる？メダパニでも喰らったのかな？自己紹介できる？

お、オレは平塚剣…。助けてくれて本当に有難う。

うん、どういたしまして、私の名前は…。

オレの視界には傷だらけの情けない姿のオレと鎧を纏った凜々しい美少女が映っていた。

これは間違いなく夢だ。

懐かしい過去の夢、オレが冒険を始めたばかりの頃の…。

懐かしむように目を細めると視界が暗転し、別の光景が映った。

まるで映画を次のチャプターに飛ばしたように。

そこは、とある街の酒場だった。

異世界の生活にも冒険にも慣れ、仲間も出来て順風満帆。毎日に充実を感じていた。

—はあ？新しいギルドを作りたい？

ああ、こういうのってやっぱ形からって言うだろ？

もしかして以前言ってた異世界？アンタまだ諦めてなかったの？

い、いや…まあ、やっぱり家族には会いたいし…、それに…。

自分が今でも夢見てるおかしな奴じやないって証明したい？

けど俺らつてもう世界中を周って行っていない場所のほうが少くないか？

そんな事ないだろ？魔界や天界は未だだろう？

アホか!?俺ら人間がそんな場所行けるわけ無いだろ!天使や魔族じゃねえだ。だからさ誰も成し得てないからこそ燃えてこない?

具体的にプランはあるのか?

神龍に会おうと思ってる…。

はあ?神龍ツ!!?あれは唯のお伽話じゃ?

俺らが今まで経験してきた出来事も伝説扱いが多かったじゃん?

その為にギルドを?

うん、神龍を追うには情報も人手も居るだろ?

それで?新しいギルドの名前は考えてるの?

勿論!俺達は今から神龍、ドラゴンを追う冒険を始める。

その冒険に相応しい名前を考えておいた!

へえ?聞かせろよ!

おう、今日から俺達は、

ギルド・ドラゴンクエストだ!!

懐かしいな。

初めは異世界に放り出されて一人ぼっちだったのに、こんなにも仲間が出来るなんて…。

視界は再び流れ始める。

出会いと別れを繰り返し、激しい戦いを乗り越えていくギルド『ドラゴンクエスト』。命を落としかけた事は一度や二度じゃない。

実際に死んだ仲間、涙を流したこともある。

それでも諦めずに世界中を旅し、遂には天界や魔界にまで足を踏み入れ、

—さあ、願いをいえ！どんな願いも三つだけ叶えてやろう！！

仲間達と相談して決めていた。

一つはオレの願い。残り二つはギルド全体の為に。

ここまで導いてくれた皆には感謝に絶えない。

—さあ、願いを！

オレの願いを聞いてくれ！オレは、オレの願いは……、

……い、おいつ!

ユサユサと身体を揺すられる。

誰だよ。人が気持ちよく夢を見ていたのに…。

「おい、起きろ!平塚!平塚剣ツ!!」

打てば響くような男子の声で意識が覚醒する。

眼を開くと赤銅の様な髪が視界に映った。

「……衛宮?」

「平塚、もう放課後だぞ?何時まで寝てんだよ」

衛宮士郎。

俺達が通う穂村原学園の二年。

人の頼みを断らない雑用パシリのお人好し。

付いたアダ名は『ブラウンニー』

一瞬オレの脳裏に痛恨の一撃を繰り出してくる奴が浮ぶが振り払う。

頭に巻いた『疾風のバンダナ』を締め直しながら身体を起こす。

「衛宮、また居残りか…?今度は何を頼まれたんだ?」

「いや、いつもオレが無条件に頼み事を引き受ける様に言うな。用事がある時くらい断

る事だつてあるぞ」

「それって用事があっても引き受けることもあるんだろ？」

「ケースバイケースだ」

ああそうですか、オレは背筋を伸ばすとカバンを取った。

「ちよつと待て平塚…、藤ね、いや藤村先生が呼んでたぞ」

「……ヤバツ、タイガー、怒ってた？」

「烈火のごとく」

帰っちゃ不味いかな？

「毎度毎度HRでグースカ寝てるおまえが悪い」

「さいで」

「大体、寝てるのに竹刀やチョーク避けるってお前…」

「ちよつと環境のせいだ」

「寝込みを襲われるってどんな環境だよ」

剣と魔法のファンタジーな環境です。

「念の為に聞くが、起きてなかったんだよな？」

「実は起きてたって言ったほうが良いか？」

「それ、冗談でも藤村先生には言うなよ」

「……ところで衛宮士郎くん」

「何かな平塚剣くん」

「どうしてオレの肩に手を置くんだていうか捕まえるんだ？」

「だから連れてきてくれって頼まれた」

「呼んでるの間違いじゃ…？」

「帰る気だつたら？」

「頼む、見逃して——」やれん

「ですよねえ」

そういうわけでオレは衛宮と一緒に廊下に出た。

「あら？衛宮君に平塚君」

「あ、遠坂」

そこには美少女がいた。

品行方正にして歩く姿は白百合、佇まいは常に優雅。

学園の誇るミス・穂村原。

良い意味でこの学園一の有名人、遠坂凜がそこにいた。

「衛宮君は兎も角、平塚君がこの時間まで残っているなんて珍しいですね？」

「いや…、オレは…」

鈴のような声と美貌に戸惑ってしまう。

美少女は見慣れているが、オレはどうにも目の前の美少女が苦手のようなだ。

(やっぱりこの娘、魔力もつてるよな…、俺は闘気も持つてるけど！)

遠坂凜の特異性に冷や汗を流しながらオレは思わず眼を晒してしまふ。

その態度に凜はクスリと笑う。

凄く可愛らしい仕草だ。おそらく自分に対して照れているのだと勘違いしたのだから。

確かに半分正解だが、その方向に勘違いしてくれたなら僥倖だ。

以前、自分の魔力が少し漏れた時、遠坂がすごい勢いですっ飛んで来た事があった。

その時は、レムオルと気配と魔力を消したおかげで難を逃れたが、それ以来この娘の前では何かと気を使い気が休まらないのだ。

バレたらバレたで碌な事になりそうにない。

せつかく帰ってきたと思ったら、この世界もファンタジーな世界だったのかと気落ちしたものだ。

「遠坂も今帰りか？」

「ええ、二人も早く帰った方がいいですよ」

「分かっている。最近物騒な事件が続いてるからな」

「物騒な事件？はて？」

そんな事あつたづけ？

首を傾げて唸るオレに土郎と凧が目を丸くする。

「もしかしてニュース見ないのか？」

「ああ、新聞も見んぞ」

「何があつても平塚は大丈夫そうだな。殺しても死にそうにない」

念の為に命の石は常備してますが何か？

「じゃあ遠坂、俺達は職員室に用があるから……その……」

土郎は顔を赤くしながら凧から顔を背けた。

「ええ、衛宮君も平塚君も気をつけて下さい」

「あ、ああ……またな」

「ええ、さようなら」

凧を見送つた後、土郎は機嫌が良さそうな声でオレに言った。

「さて、観念して職員室に行くぞ」

「衛宮つてさ」

「何だよ」

「遠坂が好きなん？」

オレの言葉に衛宮が硬直する。

そしてみるみるうちに顔を赤くして、

「ば、馬鹿！そんなんじゃないって！」

分かりやすい青年。

しかしコイツって噂じゃ一年の可愛い後輩に通い妻されてるって聞いたけど…。

「もしかしてお前ってリア充？」

「は？え？り、リア充って…？」

面白いほど狼狽える衛宮にオレは、チャンスとばかりに背を向けて走りだした。

「つておいっ！またか！待て平塚っ！！俺が怒られるんだっ！！」

「知らん！さらばじゃ！」

「待てって速っ！！？」

後ろを見ると衛宮の姿は既に豆粒。

俺はまんまと衛宮から逃走に成功したのだった。

校庭を駆け抜け校門から校外へ、人通りの多い坂道を滑るように移動する。

視界の端に二つの赤いモノが映った。

「相変わらず高い場所が好きなんだな…ていうか今日は彼氏と一緒？」

遥か向こう。およそ常人には視認できない距離。

そこは冬木と隣町の堺にあるビルの屋上。

遠坂凜が真剣な表情で佇んでいた。

学園では決して見せない真の姿。そして直ぐ傍に控える赤い男。ソイツは鷹のように鋭い眼光で街を見下ろしている。

「成る程、次々ウチの男子が玉砕する訳だ」

俺は一人納得しながらポケっと二人の姿を見ながら歩を進めた。

まるでゲームの一枚絵の様な光景に目が離せないのだ。

そして、赤い男と目が合う。

じつと互いの眼光を交差させる。

もしかして気づいているのか？

「まさかな…」

俺は溜息を付くと目を逸らし、家路へと付いた。

帰ったら『ドラスト』でもやるかな…。

あの世界での経験があつてか、漸くこの世界のゲームと向き合えるようになったのだ。

「その前に皆に会っておくか」

最近この世界の携帯ゲーム機に嵌っている仲間の姿に苦笑しつつ、俺は呪文を唱えた。

『ルーラ』

瞬間、俺の姿は光の矢と化し上空へと舞い上がった。

グングンと上昇し、光の矢は世界の境界に穴を穿った。

視界が目まぐるしく変化し、眼下には何処までも続く青い草原が広がっていた。

その先に見える巨大な大樹こそが目的地、『世界樹』だ。

青々とした若葉が力強く揺れる姿に俺は笑みを零す。

「さあ、今日もドラクエするぜっ！」

続かない？

ケン

レベル99

ゆうしや

☆・8

うちゆうヒーロー

さいだいHP：820

さいだいMP：660

ちから：400

みのまもり：210

すばやさ：355

かしこさ：240

うんのよさ：44

もちもの

E：がくせいふく

E：しつぷうのバンダナ

E：キーホルダー

いのちのいし

攻撃力：400

防御力：236

特技・呪文

メラ メラミ

ヒヤド ヒヤダルコ

ギラ ベギラマ ベギラゴン

イオ イオラ

デイン ライデイン ギガデイン ミナデイン

ジゴスパーク メガンテ ニフラム

ホイミ ベホイミ ベホイム ベホマ ベホマラー ベホマズン

キアリー キアリク シャナク ザメハ

ザオラル ザオリク

スカラ スクルト

バイキルト バイシオン

ピオラ ピオリム

マジックバリア バーハ フバーハ

マホステ アストロン

ルカニ ルカナン

ラリホー ラリホーマ

ボミオス マヌーサ メダパニ

モシヤス パルプンテ

リレミト ルーラ トベルーラ トヘロス トラマナ

インパス レムオル

火炎斬り マヒヤド斬り 真空斬り 稲妻斬り 烈破斬り

はやぶさ斬り メタル斬り 魔神斬り 五月雨斬り

疾風突き ドラゴン斬り ゾンビ斬り 剣の舞

ギガストラッシュ ギガブレイク アルテマソード

ムーンサルト 飛び膝蹴り 回し蹴り 足払い

急所突き かまいたち 正拳突き 爆裂拳

しんくうは 石つぶて じひびき 岩石落とし

すてみ

気合いため ちからため

刃の防御 大防御 かばう 仁王立ち

チーム呼び ダーマの悟り

E t c
:

Level : 2

「テメエツ!!! 一体何者だツ!!!」

「そりゃコツチの台詞だ! 部外者そつちだろ不法侵入! 警察呼ぶぞツ!!」

衛宮から逃げおおせた次の日の放課後、全身青タイツに襲われました。
なんでやねん。

この世界にドラクエは無い

次の日、悠々と登校してきた俺を待っていたのは虎と化した我が担任教師、藤村大河。
熱い説教の後、放課後も更に居残るように言い付けられ、罰として衛宮と弓道場の掃除をするように申し付けられる。

何で野郎と二人きりで貴重な放課後を過ぎさにやならんと憤慨しつつ虎の猛威に
敢え無く敗北。

夜遅くまで居残る事に…。

その時、遠坂とは正反対の悪い意味での有名人、通称ワカメが嫌味を言いに来たが衛宮にしか興味が無いようなので放置。

黙々と作業するが勝手に分かんらん。結局掃除が捗らず逆に足を引つ張つてしまい余計に時間がかかってしまった。

「(こん)ことなら一人でやったほうが速かった」

お人好しのはずの衛宮に毒を吐かれながら、校門を目指す。

しかしその時、俺は不穏な気配を感じ取った。

金属のぶつかり合う音、濃密な殺意。

間違えるはずがない。これは戦いの気配だ。

衛宮も気づいたらしく、冷や汗を流し、恐怖で肩が震えていた。

視線の先には赤と青の光が超スピードでぶつかり合い、交差し、飛び交う。

「遠坂……」

士郎の視線の先には我が校のアイドル遠坂凜。

ていうか気づくの速いなコイツ。

赤い方は、昨日の放課後見た奴だ。

青い方は知らん。

全身青タイツで紅い光を放つ禍々しい槍を振るっている。

漢にモテそうな兄貴風な男だ。正直関わりあいになりたくない。気づかれる前に退散するか。

衛宮を促し帰ろうとしたその時、ペキリ、

なんと衛宮が後ずさり、底にあつた小枝を踏みつぶしたじやありませんかい!? 「誰だっ!?!」

はい気づかれました。

俺は衛宮を連れて駆け出した。

「お、おい!?!平塚……ってうわっ!?!」

レムオルもしくはルーラで逃げようと考えたが、衛宮や遠坂に見られたくないので除外。

レムオルは認識された後では無意味だろう。

あまりスピードを出し過ぎると衛宮が危険、こりや逃げられそうにないな…。

グングンと殺気が背後から近づいてくるのを感じつつ俺は周囲を渡す。

「おい!平塚!降ろせよ!」

「うるせえ!俺だって男を抱えて走りたくねえよ!少し黙ってるいっ!」

「けどっ!」

「面倒臭え！ラリホー」

「う……、ぐうっ……」

文句をいう衛宮にラリホー一発、校内を縦横無尽に駆けつつ三階の廊下へ侵入。脇にある教室に衛宮を放り込むと教室の扉を背にして相手を待つ。

そして、

死が訪れた。

シユツという空気の掠れる様な音と閃光が光線となつて俺の心臓へと伸びる。

常人では間違いなく知覚出来無い程の速さの刺突。

鋭く速く正確無比な死の一撃は正しく急所突きのようだ。

その攻撃を身を反らせて躲すと回し蹴りと肘を叩き込む。

「何っ!？」

男の口からは驚愕の声が上がる。

俺は敵の動揺に付け込む様にもう一步踏み込む。

男の顔がはつきりと見えた。

青い髪を逆立てた猛犬の様な風貌、無駄なく引き締まった戦士の肉体。

そして真紅の魔槍。

目の前の敵は間違いなく強敵だった。

なにせ踏み込みと同時に放った正拳突きを槍の柄で防いでいたのだ。完全に意表を付いたと思っただが。

「丸腰はキツイ…」

俺は再び迫ってくる魔槍に向かって腕を突き出す。

ギイン、という鈍い音が廊下に響く。

「何かしこんでやがるな？」

「正解」

制服の袖から刃が奔る。

剣はキラーピアスを装備した！

翠風の如き二つの刃が暗闇を照らし左右から青い男を襲う。

「ちいっ!!?」

ギイン！キントツ！カッ！キインツ!!!

音速を突破した斬撃と刺突が交差し火花を散らす。

何十合と撃ちあう内に男の口から笑みが漏れ始める。

「ハハッ！ハハハッ！テメエ、一体何者だっ!!?」

強者との戦い。

それは現代では有り得ない神代の戦い。

青い男は目の前の侵入者の正体よりも、その強さに魅了され始めた。何故なら自身が望む全てが其処にあったからだ。

目の前の男は自分と同類ではない。間違はなく人間だ。だというのに俺と対等に戦っている。

面白い！もつと戦り合おうじゃねえかつ!!

「そりゃコツチの台詞だ！」

「同感だ！けどもうどうでも良いっ！今はこの戦いを楽しもうやつ!!」
「断るっ!!」

こんな奴に付き合うなんて冗談じゃない。

此処は早々に撤退だ。

隙を突いて、若しくは隙を作って衛宮を回収！んで退却だ！

「…逃げればもう一人を殺す。お前は逃げれてももう一人はどうか？どのみち目撃者は消さなきゃならんのだな。二人揃って生き延びるには俺を倒すしか道はねえぞ」

「……てめえ」

「つまらん偵察任務に殺し、だがここに来て僥倖だ。まさか現代にお前のような戦士がいたとはな…」

「バトルジャンキーかよ」

本当にうんざりする。

異世界で出会ったあの男と同類とは…。

「そう嫌うなよ。そろそろ奴らも来る。その前に決着といこうや」

瞬間、真紅の魔槍が更に禍々しい光を放ち始めた。

「俺の名と槍の真名、手向けとして受け取りな」

—刺し穿つ、

槍から放たれる殺意が空間を侵食していく。

まるで即死呪文ザラキーマの様な死の気配に俺は息を呑む。

—死棘ポルグの槍 ツ!!!

槍は真紅の光線となり不規則な軌道を描きながら凄まじいスピードで俺へと襲いかかる。

確かに速いが捉えきれないほどじゃない。

俺は全神経を槍の動きに集中、狙いは俺の心臓。

「(っ)だっ!!」

俺はキラーピースを交差させて魔槍を払い落とした……筈だった。

「な、何…?」

何が起きたのか分からなかった。

俺は間違いないく槍を切り払ったのだ。

にも関わらず、魔槍は俺の胸に深々と突き刺さっていた。

「終わりだ。誇つていいぜ。まさか英霊でもない魔術師でもない奴に宝具を開放する事になるとはな…」

槍が俺の胸から引き抜かれ、男は背を向けて教室へと向かう。

衛宮を殺すつもりなのだろう。

「させるかっ!!」

「な、何っ!!?」

俺は隙だらけの無防備な背中に向かって跳んだ。

火炎と冷気をそれぞれ纏ったキラークリアスを敵に向かって叩き込んだ。

はやぶさ斬り

一瞬でほぼ同時に繰り出される四の斬撃は空気を切り裂きながら無数に増え続ける。

四、八、十六、三十二、六十四、百二十八。

鮮血が舞う、

激しさと鋭さを増していく無数の斬撃が目の中の男の全身を切り裂いていく。

思った通りだった。

どういふカラクリか分からないが、目の前の男は通常の攻撃が一切効果がなかった。実際、先ほどの立ち会いにおいて何度か良い一撃が確実に入っていたのだ。

しかし男は平然と反撃を繰り出してきた。

物理攻撃無効化とかチートかい！しかも先程の魔槍の一撃。

常備していた命の石が無ければ間違いないく死んでいた。

俺は内心焦りまくりだった。

そこで戦い方を変えることにしたのだ。

物理攻撃を主体とした戦いから魔力を用いた戦いにシフトチェンジしたのだ。

結果はご覧の通り、

「はあああああああああああああああつ!!!」

「ごはあああああああつ!!」

反応が遅れた男は俺の連続して繰り出されるはやぶさ斬りに為す術もなく八つ裂きにされていく。

冷気と炎を纏った双刃、攻撃力は低いがこの狭い通路において効果は抜群だった。

「トドメだ!」

キラードピアスが男の喉元に迫る。

殺った! そう思った瞬間、男はその場から忽然と姿を消した。

「…っ、転移？リレミトの類か？」

「た、助かった…のか？」

衛宮が教室から這い出すように現れる。

「起きたのか？」

「ああ…って、違うっ！平塚！お前、魔術師だったのか!？」

「はあ？魔術師？何言ってるのお前」

「恍けるな！さっき魔術使ってたじゃないか!？」

「落ち着けよ衛宮、俺も正直混乱してるんだ」

「けど!!」

「取り敢えず、俺はお前の言う魔術師じゃない。それに俺達の疑問には本物の魔術師が答えてくれると思うぞ」

「…それって？」

「なあそっただろ？遠坂凜」

「こんばんは平塚君、衛宮君。疑問という意味でなら私の問にも勿論答えてくれるわよね？」

廊下の暗がりから現れたのは先程まで運動場のトラックで赤と青の戦いを堂々と観戦していた美少女。

遠坂凜は優雅な佇まいで、しかし昼間の優しげな表情から程遠い殺気を纏った空気を放ちながら現れた。

その横には先程の紅い男の姿。

「ビルの上の次は夜の学校でデートか…ずいぶんと物騒なデートだな…」

「……やはり見えていたな」

「そつちこそ」

一触即発の空気が廊下を満たす。

紅い男は両の手に白と黒の双剣を出現させ、遠坂は魔力を孕んだ宝石を構える。

そこに士郎が割り込んでくる。

「ちよつとまってくれ！これから話し合うんじゃないのか!? 落ち着けよ！」

両者は視線を交差させた後、同時に武器を下ろした。

士郎は漸く溜息を絞り出した。

「取り敢えず、河岸を変えて話をしないか？」

「そうね、その前に平塚君、これだけは答えて」

「なんだい」

「貴方は何者…ううん、貴方はナニ？」

虚言は許さない。

遠坂凜の眼光がそう言っていた。

剣はバンダナを締め直すと、溜息を付いた。

「ナニって聞かれてもなあ…遠坂の納得できる答えが出せるとは思えないけど……そうだな、異世界帰還者、じゃ駄目か？」

頭をボリボリと掻きながら剣はカミングアウトするのだった。

俺の言葉に遠坂の眼が釣り上がった。

なんか分かんが気に触ったようだ。

「異世界、ですって？私を馬鹿にしているの？」

「やっぱりこうなつたか」

まともに答える気が無い。

遠坂は俺の答えをそのように受け取ったようだ。

「だから河岸を変えようっていったんだ」

込み入った話をしなければならなくなるし、この世界のファンタジーな情報も出来れば知りたい。対処法も含めて。

「ていうかさ、遠坂…」

「ナニよ?」

怒りで肩をワナワナさせている美少女。

うん、何時ものミス・穂村原とは似ても似つかんな。

「それがお前の素か? さつきから衛宮が怯えてるぞ?」

「遠坂……」

「遠坂の本性は凶暴つと…柳洞の言うとおりだったな」

「凜、話が逸れている」

「ここで初めて紅い男が口を開いた。

中々のイケメンボイス。

「そうね……じゃあ衛宮君と平塚君、家はどっちが近いのかしら?」

「ん? 遠坂ん家は含まれないのか?」

「お生憎様、魔術師が他人を家に招くわけがないでしょう?」

「そういうものか?」

「じゃあ俺の家に来ないか?」

士郎が手を上げて主張した事で一行は衛宮家へと向かう事になったのであった。

厄介な事になってきたな…。

俺はキラピーアスを袖に隠しながら今日で何度目かになる溜息を付くのだった。

遠坂は異世界の話、信じてないみたいだし、最終的にはルーラで異世界に連れて行けば信じざるをえないのだろうけど、出来れば俺以外の人間を連れて行きたくないんだよな…。

俺は異世界に独占欲のようなものを感じていた。

あの世界に行っても良いのはこの世界で俺だけだ的な…。

それに今回のような非日常が続くなら、もっと強力な武器も持ち込みたいし…。

「着いたぞ。此処が俺の家だ」

思考の海に入り込んでいる間に衛宮の家についたようだ。

「おお、武家屋敷…：…ん、これって結界か？」

「みたいね」

「ああ、侵入者を知らせてくれる簡易なやつだよ」

士郎はそう言いながら鍵を開けて玄関に上がった。

「さあ上がってくれ」

「お邪魔します」

士郎の案内されて俺達は居間へと通された。

そして互いに向かい合うように座布団に座る。

「さて、今度こそ話を聞かせてもらおうわよ」

「はあ…、分かったよ。じゃあ何から聞きたい？」

こうしてこの世界の魔術師との初の対話が始まったのであった。

続く？

ケン

レベル99

ゆうしや

☆・8

うちゆうヒーロー

さいだいHP：820

さいだいMP：660

ちから：400

みのまもり：210

すばやさ：355

かしこさ：240

うんのよさ：44

もちもの

E：キラーピアス

E：がくせいふく

E：しつぷうのバンダナ

E：キーホルダー

攻撃力 : 410

防御力 : 236

特技・呪文

メラ メラミ

ヒヤド ヒヤダルコ

ギラ ベギラマ ベギラゴン

イオ イオラ

デイン ライデイン ギガデイン ミナデイン

ジゴスパーク メガンテ ニフラム

ホイミ ベホイミ ベホイム ベホマ ベホマラー ベホマズン

キアリー キアリク シヤナク ザメハ

ザオラル ザオリク

スカラ スクルト

バイキルト バイシオン

ピオラ ピオリム

マジックバリア バーハ フバーハ

マホステ アストロン

ルカニ ルカナン

ラリホー ラリホーマ

ボミオス マヌーサ メダパニ

モシヤス パルプンテ

リレミト ルーラ トベルーラ トヘロス トラマナ

インパス レムオル

火炎斬り マヒヤド斬り 真空斬り 稲妻斬り 烈破斬り

はやぶさ斬り メタル斬り 魔神斬り 五月雨斬り

疾風突き ドラゴン斬り ゾンビ斬り 剣の舞

ギガスラツシユ ギガブレイク アルテマソード

ムーンサルト 飛び膝蹴り 回し蹴り 足払い

急所突き かまいたち 正拳突き 爆裂拳

しんくうは 石つぶて じひびき 岩石落とし

すてみ

気合のため ちからため

刃の防御 大防御 かばう 仁王立ち

チーム呼び
ダーマの悟り

Level : 3

「な、なんなのよこれは——っ?!?」

だから異世界だつて。

世界樹の下で遠坂が絶叫する。

衛宮なんかはポカンとして開いた口が塞がらない様子だし…。

しかしこういった反応が見られるなら、ただ連れてくるだけなら有りかもしれん。

この世界にドラクエはない

青い男との戦いの後、

俺達は互いの情報を交換する為、その話し合いの場として衛宮家に訪れた。

そこで遠坂から語られる話の内容は驚愕すべきものだった。

神秘とその力を担う魔術師の実在。

そして今この冬木市で行われている魔術師たちの大儀式『聖杯戦争』。

令呪と呼ばれるマスターの証に選ばれた七人の魔術師と英霊たちの殺し合い。

最終的に残った一組にあらゆる願いが叶う願望機『聖杯』が与えられるのだという。遠坂と行動を共にしている赤い男も召喚された英霊だとか。

以後、遠坂に習って俺もアーチャーと呼ぶことにする。

そして遠坂が話した次は当然オレの番である。

遠坂曰く、オレの存在は有り得ないのだとか。

「はて、オレ何かしたっけ？」

「アンタ自分が何したのか理解しているの？ 魔術師でも有り得ないのに英霊を退けるなんて人間業じゃないわよっ!!」

成る程、それで先程からアーチャー氏は霊体化とやらもせず警戒しているのか。

先程から殺気まで飛ばして牽制しておるし…。

しかし人間レベルをカンストさせると英霊も圧倒できるのか…。

絶対に有り得ないことだけど、衛宮と遠坂もレベリングすれば英霊に勝てるようになるのか？

閑話休題、

オレは遠坂達に自分の身に起きたことを掻い摘んで説明する。

勿論だが赤の他人に全てを語る気は毛頭ない。

ゲームにおいて道具袋の役割を果たす冒険者なら誰もが持つアイテムボックスを見

せたり、呪文を使ってみせたりとしていく内に、またまた遠坂の表情が般若の如く…。

当然だがアイテムボックスの自身は薬草や聖水くらいしか見せていないが…。

「……ア、アンタ…、本当に何なの」

遠坂曰く、オレの呪文はやっぱり在り得ないらしい…。

何でもこの世界の魔術師はこの世界に固定された魔術基板に魔術師が命令を送ることとで、予め設定された機能が発現するのだ。

魔力は命令を送るための電気信号の様な役割を果たす為のもので、そもそも魔力とは人体には害らしく基本的に魔術回路を持つ魔術師にしか扱えないのだとか。

何でも生命力を魔力に変換しているのだという。

成る程、そんな面倒くさい設定があるのか。

「じゃあオレの呪文は魔術とは無関係だな。全部自前だし、わざわざ生命力を魔力に変換なんて真似もしないし出来ないし」

「だから聞いているのよ。アンタはナニって？」

まるで人外を見るような眼でじっと此方を見つめてくる遠坂。

そう、英霊と人間の間には絶対的な差が有るのだ。

並の英霊でさえ、相手にするということは生身で最新鋭の戦闘機に挑むようなものである。

そりゃ対抗どころか圧倒し撃退すれば警戒通り越してビビりもするか…。

ドラクエ世界にはレベルという概念があるが説明する気はない。

冒険者と呼ばれる存在は倒した魔物の魂を浄化し取り込む機能があり、それが俗に経験値として蓄積され霊格という名のレベルが上がるのだ。

十もレベルが上がると、もう超人と言っても良いだろう。

しかしオレの攻撃が効かなかったのも納得だ。

遠坂の話しによれば英霊という存在は基本的に霊体、魔力供給によって実体化してるとはいえ、基本的に神秘の籠っていない通常の攻撃は効かないのだとか。

という事はだ、

奴らに対向するには魔力が宿った特殊な武器か魔法剣や呪文じゃないと駄目ってことになる。

しかし遠坂、やっぱり美少女だなあ…。

「…ポ／／／」

「巫山戯ないで！」

美少女に見つめられるとつい…。

おっぱい小さいけど…。

「……ほん……だからさつきも言っただろ？ 異世界帰還者だつて……、はつきり言つとくけど、これ以上は本当に言い様がないからな」

「平塚はさ、その異世界であんなに強い力を身につけたんだろ？ 異世界に実際に行ければ遠坂も平塚の話信じざるをえないんじゃないか？」

「ここで衛宮が初めて口を開く。」

その眼は何かを期待する様な、何かに憧れる様な、そんな眼だった。

しかしオレは異世界の存在を教えても、他人を連れて行くのは嫌なのだ。

「遠坂が言つてただろ？ 魔術師の基本は10日交換だつて」

「いやなんかニュアンスが違うぞ？ 等価交換だろ？」

「オレは遠坂から貰つた情報と異世界招待旅行が等価だとは思えない」

「無視か、それに旅行つて」

「何ですつて」

遠坂が立ち上がつてオレを見下ろす。

ニーソックス美脚が眩しいぜ。

そんな心境を隠しつつオレは冒険者としての表情で立ち上がり、遠坂を睨み返した。

アーチャーも警戒するように戦闘態勢に入る。

互いに睨み合うこと数秒、拉致があかないのでオレが折れることにした。

まあ直ぐに帰ってもらえば問題なからう…。

そんな訳で異世界の存在を証明するために外に移動、瞬間移動呪文ルによって異世界に連れて行くことになったのだ。

本当に、いや本当に不本意だったが…。

そして冒頭に戻る。

遠坂は常に優雅たれの家訓も忘れて頭を抱えて絶叫する。

衛宮の中の理想のマドンナ像がガラガラと音を立てて崩れていく。

「取り敢えず落ち着いたら?」

「……ンンツ、そうね…見苦しいところを見せたわ…アーチャー、アンタはどう思う?」

返事がない。遠坂は会話できる仲間を連れていない。

「は?アーチャー?…そんな、アーチャーがいない…平塚君!」

確かにアーチャーの姿が無い。気配も感じられない。

ルーラと一緒に来たはずなんだけど、もしかして途中で落ちたかな?

遠坂が食って掛かってくるが、

「オレにも何が何だか…って、今はそれどころじゃないぞ」

「…え?」

「な、何だっ!?ば、化物…っ!」

街でもない人間の生活圏外で長居しすぎたか…。

オレの視線の先を二人が追い、驚愕の声を上げる。

ドラクエの世界ではお馴染みの魔物が其処にいた。

レッサーデーモンが七匹、デスパークが5匹、群れで登場だ。

勿論ゲームのように画面いっぱいに限界、これ以上増えないことは無い。

時間を掛けると続々と魔物が集まってくるだろう。

最近では赤色と青色ばかり見ている気がする。

「これ、ヤバくないか…」

「何よ、この幻想種の数…どう分類すれば…」

「取り敢えず、お前ら下がってる。手早く片すから」

「私も戦うわよ。手は多いほうがいいでしょ」

遠坂が前に出ながら自信満々に言った。

自信があるのなら任せてもいいか？

「じゃあ青いの任せる」

まあ魔術が使えなくても攻撃手段が有るのだろう…。

オレは頷くとレッサーデーモンの群れに身体を回転させつつ飛び込んだ。

強い遠心力から繰り出される圧倒的な運動エネルギーは闘気を纏い回転する。
—ムーンサルト—

そのパワーはすれ違ったレッサーデーモンの四肢を容易に引き裂いてく。
ギアアアアアアッ!!!

七匹のレッサーデーモンは断末魔を上げて八つ裂きにされた。

「さてと、遠坂の方は」

「キヤアアアアアッ!!?」「と、遠坂!!?」

「って駄目じゃん」

遠坂は衛宮に庇われながらデススパークの放ったベギラマに襲われていた。

「何やってんだよ」

「魔術が…、魔術が使えないのよ!!?じゃあ此処は本当に…?」

まだ信じてなかったのか…。

おれは内心呆れながらデススパークと遠坂達の間を割って入ると、
爆裂呪文!!

呪文の発動と同時に大気が揺れて爆発が巻き起こる。

オレは中級爆裂呪文によってデススパークの群れを吹き飛ばした。

「大丈夫か……つとつ?」

いきなり胸ぐらを掴まれる。

「ねえ、平塚君」

「何かな遠坂さん」

遠坂は深呼吸する。息がめっちゃ掛かってヤバイんですが…。

衛宮も羨ましそうに見ないの。

そして一泊おくと口を開いた。

「ここは私達のいた世界じゃ…、地球じゃないのね？」

「だから異世界だって」

「……今度こそ分かったわ…、納得したわけじゃないけど、魔術が使えないこともア

チャーが存在できないことも、どうにか理解した…」

この世界には遠坂の言う魔術基板が存在しないのだろう。

だからいくら魔力によって信号を送っても魔術基板は働かない。

魔術も発動しない。

そもそもこの世界の呪文は自前の魔法力によって魂に刻まれた呪文の情報が開放さ

れ発動するのだ。

前提条件から違う。

「嗚呼、此処は間違はなく異世界だ…痛っ、この痛みは夢じゃない」

「ごめんね、衛宮君…庇ってもらって…」

「気にするなよ遠坂、怪我なら遠坂もしてる…ひどい火傷だ」

「互いにね」

いちやつく二人がなんかムカつく。

しかしさすがに怪我したまま放置は出来ないので、

治癒呪文^{ベホマラー}

オレの掌から優しく白い光が風のように流れ二人の傷を癒していく。

「凄い…、こんな魔術まで…」

「魔術じゃなくて呪文な」

「もう認めるしか無いわね」

オレは傷が癒えて立ち上がった二人に向かって言った。

「納得した所で、そろそろ帰らないか？ぶつちやけ異世界を証明した以上、ここに留まる理由もないだろう？」

「え？もう帰るのか？」

衛宮は名残惜しそうに肩をすくめる。

「当然だろ？え？衛宮は残るのか？ここに一人で？死ぬぞ？……ってお前もか遠坂」

遠坂までもう帰るの？みたいな表情してるし…。

あんな目にあつたというのに、懲りない二人。

「たしかに危険だけど、魔術師としてこの世界には純粹に興味があるわ」

「だつたら聖杯戦争とやらが終わつてからでもいいだろ」

本音はこれ以上こいつらをこの世界にいてほしくないだけだが…。

「じゃあせめて人の住む街だけでも見せてよ。どうせ呪文でパツと移動できるんでしよう」

遠坂、笑顔だが眼だけが笑つてない。

一瞬、力尽くで強引にルーラで帰ろうかと考えて、その考えを放棄する。

ここで険悪になれば帰つた後の関係も面倒くさい。

英霊という存在は戦えないわけではないが、アーチャーの実力も未だ未知数だ。

仕方がない。余計なことしないように見張つておくか…。

「分かつたよ。でもこの世界ではオレの指示に従つてもらおう。それが条件だが」

「勿論、右も左も分からない世界で勝手な行動を取る気はないわ」

「ああ、オレも指示に従うよ」

「分かつた。じゃあ異世界旅行ツアーに不本意だが招待だ」

オレが手招きすると二人は軽い足取りで側までやってきた。

オレは一拍置いて呪文を唱える。

瞬間移動呪文!!

瞬間、俺達は一筋の光と化して空へと舞い上がった。

凄まじい速さで離れていく地上を見ながらオレは決意した。

—こいつら二人は断じて冒険者にはしない—

そして異世界旅行ツアーは後半に続きます。

続く？

続く？

おまけ

F a t e 風ステータス

マスター：—

真名：平塚剣

クラス：勇者

パラメーター

属性：混沌・善（むつつりすけべ）

筋力：A++

耐久：B

敏捷：A

魔力：B+

幸運：E—

宝具 : E↘A++

クラス別能力

呪文 : E↘A+

特技 : E↘A++

ためる : |

心眼(真) : A

単独行動 : EX

職業勇者 : |

ダーマの悟り : |

宝具 : ???

ためる : どんどんテンションを溜めてスーパーハイテンションに!

職業勇者 : 徐々に傷が癒えていく(毎ターンHP回復。ベホイミ並)

ダーマの悟り : 様々な職業に転職できる。

スーパーハイテンション : A++

この状態になると一定時間無敵となる。

闘気や魔法力を消費しなくなる。

全能力が飛躍的にアップする。
必殺技が使える。

Level : 4

カソ村。

世界樹から南西に存在する人口が100人にも満たない小さな村。

断じて過疎村ではない。

そんな事を言えば村人から怒られる。

そしてこの村はオレがこの世界に来て初めて訪れた村だった。

冒険者の為の『ルイーダの酒場』さえない今どき珍しすぎる村だ。

まあルイーダの酒場が無いからこそ、この村を選んだわけだが…。

しかし武具屋に揃っている品は良質なものが多い。

その所為で、当時はこの世界に来て初めての村だというのに何の武器も防具も手に入
れられなかった訳だが…。

村の外にでる魔物はレベルが低いので問題なかったが…。

「ねえ平塚君」

「何かな？」

「私は街に連れて行ってほしいと頼んだんだけど？」

「そうだったけ？」

「此処は、何も無いな……」

そこ衛宮、失礼な事を言うな。

気の良い人達ばかりなんだぞ。

「……お？ おめえ……ケンじゃねえかつ!？」

村人Aことオツチャンが気さくな声を掛けてくれる。

どうやら野良仕事の帰りらしい。

「久しぶり、オツチャン 元気だった？」

「おう！おめえは、あれ以来全く村に立ち寄りねえから、どっかで野垂れ死んだのかと

思ってたよ」

オツチャンはガハハと豪快に笑う。

にしても相変わらずの村人スタイル。

牛の世話してるクワを持ったドット絵のオツサンのコスプレにしか見えん。

「お前のほうが失礼じゃないか」

衛宮、人の心を読むな。

え、声に出てた？衛宮と遠坂が互いに頷いている。

いつの間にも仲良くなったんだこいつら。

もしかして戦闘中に庇ってもらって、キユンと来ましたか遠坂さん。

「……ニコ」

遠坂凜はニコリと微笑むと、ツカツカとオレの側までやってきた。

そして足払いでオレをスタンさせ、

然る後にそのニーソに包まれた御御足で、オレをゲシゲシと蹴り回すのであった。

特殊な性癖のない俺には唯痛いだけでご褒美でも何でもなかった。

「痛い痛い！マジやめて！ほんと！マジでごめんてっ!!?もう言わないからっ！」

「ガハハ、新しい仲間かい!?おめえも今じゃ一端の冒険者か！噂はこんな田舎にも届いてるぜ！」

「冒険者？噂？」

オツチャンの言葉に遠坂が足を止めて首を傾げた。

も、もう少しで、み、見え……絶対領域が……

「もしかして平塚って有名人だったりするの？」

「なんだい知らねえのか？冒険者でこいつのことを知らない奴はモグリだぜ？」

「オツチャン！」

なんか不味い。

そう思ったオレは咄嗟に声を掛けて話を中断する。

「ここで立ち話もなんだしさ」

「おお、そうだったな…、じゃあ家に来るか？久しぶりに飯食わせてやるよ」

「ハハツ！サンキュ、じゃあ言葉に甘えるとするよ」

「じゃあ俺は村の皆に知らせてくるよ。ケン久しぶりに皆に会って行ってやってくれ。俺はその間に飯の支度を済ませておく…：おーいっ！みんなあつ！ケンのやつが戻ってきたぞーっ!!」

オツチャンは大声で叫びながら家に帰っていった。

「さて行くか」

「ちよつと待ちなさい平塚君」

「なんだい？」

「アンタ、私達に何か隠してない？」

「それは俺も気になってた。さっきの人の話も途中で遮ってたし」

遠坂と衛宮は俺の前に立ち塞がる。

「それに、未だ答えて貰って無いわよ」

「何の話だ？」

「アンタがサーヴァントと対等に戦える理由よ」

「勿論長年の修行のた」「嘘ね」

遠坂は俺の言葉を遮るように言葉を重ねてきた。

失礼な。ちゃんと死ぬほどの修行はしたぞ。

「確かに：鍛錬だけで、サーヴァントと戦えるようになれるなんて明らかに異常だよな」

「さっきの人が言っていた冒険者、それがアンタの強さの秘密に係してそうね」

本当に泣けてくる。

何でこいつらこんなに感が鋭いんだよ。

「無理に隠そうとするから余計に怪しまれるのよ」

「じゃあ俺も冒険者になれば平塚のように強くなれるのか？」

衛宮は期待の眼差しを向けてくる。

「ここは早々に諦めさせたほうが本人の為だな。」

「そんな訳ないだろ。一朝一夕で力が手に入るか。冒険者はそのキツカケに過ぎんよ」

俺達は村人たちに挨拶を返しながら、オツチャンの家へ向かった。

「美味かった：：ごちそうさん」

「ええ、こういうのを郷土料理っていうのでしょうかね」

村人たちとの挨拶を終わらせたオレたちはオツチャンの家へ到着した。

ちょうどタイミングよく夕飯の支度も終わっていたところで、さっそく俺達はオツチャンの出してくれた料理に舌鼓を打った。

「ガハハ！いつもは俺一人の寂しい食事だからな！逆に礼を言うのはコツチのほうだ！」

相変わらず気の良い親父である。

食事も終わり一息ついたところで、そろそろ帰らないかと提案する。

今日中に元の世界に帰らないと。学校もあるわけだし。

オツチャンに礼と挨拶をして家を後にする。

既に外は薄暗くなっており、夜の帳が落ちようとしていた。

「なあ平塚」

衛宮が真剣な表情で口を開いた。

「何だよ」

「お前に頼みがあるんだ」

「頼み？まあ予想はついてる。冒険者になりたいんだろ？」

衛宮は驚いたように目を見開いた。

「どうして分かったんだ？」

「まあオレも男子だからな。強い力に憧れる気持ちは分かる」

「じゃあ…」

「だが断る」

気持ちは分かるが、それとこれとは話が別だ。

オレには衛宮の願いを聞いてやる義理も義務もない。

それに冒険者になったところでレベルを上げるには実際には魔物を倒す必要がある。

それ以前に冒険者の資格を取るのには面倒だし金も掛かる。

大成した冒険者にとっては大した額ではないが…。

だからといって衛宮の為に金を払ってやる義理はない筈だ。

オレの拒絶の言葉に衛宮の口がへの字に曲がる。

「衛宮、冒険者になったからといって、いきなり強くなれる訳じゃない。オレだって今の実力になるまで結構な年月掛けてるんだ。大体、元の世界での生活があるのに冒険者になる暇も、冒険者家業をする暇も有るわけ無いだろ？もしかして片手間で作れるとでも思ってたのか？冒険者舐めてるだろ」

「そんな事は…」

一気にまくし立てるオレに対して衛宮は納得は行かないが反論できずに唸る。

「確かに冒険者の力は魅力的ではあるけど、こんな力、元の世界だと完全に封印指定確定

よ。コツチに骨を埋めるなら兎も角、衛宮君はその気はないのよね？」

衛宮は遠坂の言葉に頷いてポツリと本音を漏らした。

「ああ、オレは唯みんなを守る正義の味方になりたいだけなんだ…」

正義の味方。

常日頃から人助けをしているお人好しだと思っていたけど、ガチで将来の夢が正義の味方とは…。

ここつて笑うところなんだろうか？ いい歳した高校生が夢みたいいな事を…。

しかし不思議と笑う気にはなれないし実際に笑えなかった。

「それに平塚みたいな力が手に入れば聖杯戦争で犠牲になる人たちを守るかもしれない。そう思ったんだ」

衛宮は真剣そのものだった。

コイツは正に正義の味方なんだろう。

「頼むよ。少なくとも冒険者になれば力が手に入るキツカケにはなるんだろ？」

衛宮は諦めきれずにオレに詰め寄った。

しかしオレも譲る気はない。

仕方なしにラリホーで眠らせて元の世界に、

「待って衛宮君！」

遠坂が衛宮の腕を掴んで静止する。

「な、何だよ遠坂!？」

憧れの遠坂に腕を握られて顔を赤くする衛宮。

遠坂は衛宮の反応に気にすることなく、ある一点を睨みつけていた。

その視線の先は衛宮の手の甲、そこには赤い文様のようなアザが刻まれていた。

「令呪ですって!?!衛宮君、マスターだったの?」

「え?俺が……、マスター?」

「私としたことが、今更気がつくなんて……ああもう、うっかりにも程が有るわよ」

そこで俺は閃いた。

「良かったじゃないか衛宮」

「え、どういうことだよ。言っとくけど俺は聖杯なんかに興味はないぞ」

「違うってマスターになったってことは英霊ってやつを呼んで使役できるって事だろ?」

俺は遠坂に確認するように問う。

「ええ、どんな英霊が呼ばれるかは触媒次第だけど……まさかアンタ、衛宮君に」

「おう、衛宮がマスターになれば英霊って戦力が手に入る。冒険者になって修行を積むより手っ取り早く戦う力が手に入るんだ。聖杯戦争で犠牲になる人だって助けられる

ぞ」

「いまいち納得出来ないけど、確かにその通りだ……」

衛宮は自身の令呪を見つめながら納得したように頷いた。

よし、冒険者の力から英霊の力に興味が移った。

「そういう訳で遠坂、衛宮が召喚する手助けを頼む」

「何で私が？ 衛宮君がマスターなら私達、敵同士じゃない」

「え？ 俺は遠坂と戦う気は無いぞ？」

「こう言ってるが？ それにさっきの戦いで庇ってもらってただろ？ 魔術師の基本は等価交換とか言ってたか？」

「ああもう！ 分かったわよ！ 召喚には私も立ち会おう！ これでいいんでしょう！」

そんな感じで衛宮と遠坂は聖杯戦争で同盟を組む事に決まった。

「じゃあもう遅いし、さっさと帰るか？」

「ああ良かった！ ケン！ まだ居った！」

そこでオツチャンがやってきた。

「言い忘れておつたが、二日前デイスさんが来たぞ」

「デイスが？ 何でこの村にあいつが？」

デイス・アルキード

嘗て共に戦った仲間であり、ギルド・ドラゴンクエストの一員。
そしてメンバー最強の戦力。

実際に今の俺とは比べ物にならないほど強い怖い女だ。

神龍に会った後、何を思ったのか一人旅に出掛けてしまったらしい。

「ウム、ふらりと村にやってきてな。お前さんを探しておるようだったぞ」

「はあ？何であいつがオレを……あ！」

そういうば元の世界に帰る前、自由に行き来できるようになった事、言っ
てなかったわ。

それで最近になってオレが二つの世界を行き来している事を他の仲間から知ったんだ。

「やばい」

オレの背中に冷たいものが流れた。

「平塚？どうしたんだ酷い汗だ？」

「デイス？誰かしら？」

「すぐに帰るぞ二人共」

取り敢えず明日も速いしここは帰ろう。

デイスの事は先延ばしにしてしまおう。

今まで忘れてたとか、もし一あの女《デイス》が知れば殺されかねん。

「くあWせdrftgyふじこーp」

「ど、どうした平塚!？」

「やめろ!やめてくれ!それだけは!変身止めろ!ひいつ!?!竜鬨気はっ!?!ドルオーラは勘弁してくれッ!？」

「なんか錯乱しだしたぞ」

「あのデイスさんって一体…」

「うん?ああ…簡単に言うとな、この世界で最強の冒険者だな」

オッチャンは誇らしげに腕を組む。

最強というかチートの塊だろ。存在そのものがバグってるのがあの女だ。

ていうかデイスが居なければ間違ひなく神龍まで辿りつけなかったと思う。

まあデイスは自分の力を無闇に振るうことは由としなかったので、余程のことがない限り力を貸してくれなかったが…。

しかし以前、^{デイス}竜の逆鱗に触れた時、ぶん殴られぶつ飛ばされた結果、城壁を突き破

り更に数十メートルも先にある湖に突っ込んで以来、デイスに対してトラウマが芽生えてしまったのだ。

結構短気なやつなのだ。

今でも仲間として信頼はしているが、あんな事件があつてかディースのことは絶対に怒らせないと決めていたのだ。塵にされる。

ちなみにお気づきかも知れないが、ディースは竜の騎士です。

初めて額の紋章が光つた時は空いた口が開かなかつた。いや塞がらなかつた。

「んっ！取り敢えず落ち着いた。さあ今度こそ帰ろうすぐ帰ろう！ハリーアップだ！」

「それって問題を先送りにしただけじゃ…」

「仕方ないだろ？コッチにも元の世界での生活があるわけだし」

「はいはい。でもそんなに怒るって事はそれだけ想われてるって事でしよう？自分から会いに行つた方がいいわよ」

遠坂は意地の悪い笑みを浮かべてからかうように言つた。

確かに全殺しから半殺しに負けてはくれそうだな。

「考えとく。じゃあ行くぞ」

—瞬間移動呪文!!!

そんな訳でオレ達は再び元の世界に帰還した。

「無事元の世界に戻ってくれたな…」

「ええ、得難い経験だったわ」

「凜！無事だったか」

そこで赤い弓兵さんが登場。

霊体化を解いたのだろうか、遠坂の前に現れる。

「アーチャー、私は無事よ。取り敢えず要点だけ言うわ衛宮君と同盟を結ぶことにしたから。文句も詳しいことも後よ」

「色々と言いたいことはあるが君のことだ。何を言っても無駄だろう」

「分かっているじゃない？流石わたしのサーヴァントね」

「また令呪を使われてはかなわんからな」

アーチャーは肩をすくめて溜め息を吐いた。

なんか苦勞してそうだな。

幸薄そうな背中に想わず共感を覚えてしまう。

オレも運だけは悪かったからなあ…。

カジノに言っても負けてばかりだし、宝箱を開けてもミミックばかりだし。

そして俺達は士郎の案内によって英霊召喚に立ち会うことに。

敵意がない事をアピールする為、遠坂の指示でアーチャーには霊体化してもらおう。

蔵に魔方阵があるとのこと、そこで遠坂のアドバイスの許召喚を行う衛宮。

召喚は成功しその結果、

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じ参上した……問おう、あなたが私のマスターか？」
アホ毛の可愛い金髪美少女が現れた。

そして、

「貴様！何者だっ!!？」

金髪美少女に襲撃された。

なんでやねん。

続く？

おまけ

デイス・アルキード

おんな

セクシーギャル

レベル：99

竜の騎士

さいだいHP：999

さいだいMP：999

ちから：720

みのまもり：450

すばやさ : 610

かしこさ : 525

うんのよさ : 777

もちもの

E : 真魔剛竜剣

E : ドラゴンメール

E : ドラゴンシールド

E : ドラゴンフアング

E : スーパーリング

攻撃力 : 850

防御力 : 570

呪文・特技

?????呪文
出来ないことのほうが少ない。

竜闘気 紋章閃 魔法剣 竜魔人 竜闘気砲呪文など

Level : 5

劍^{セイバー}の英靈が初めてその男を目にした時、感じた事は云いようのない悪寒だった。

彼女の優れた直感が知らせてくれる。

この男は害にしかない存在だと。

目の前で呆けている赤毛の青年が自身のマスターに間違いない。

その後ろで悔しそうにしている美少女は他の英靈を使役する魔術師^{マスター}だろう。

英靈の姿が見えない。おそらく霊体化させているのだろう。倒すなら今だ。

しかしそれよりも、

「おお、すげえ美少女…」

その口調とは裏腹にこちらを観察している男の存在だ。

—この男は…、ダメだ…。

気がついた時、弾かれたように飛び出し不可視の聖劍を男に向かって振り下ろしていた。

召喚されたばかりだというのに。自分から敵を作るような愚行を犯したのである。

しかし彼女の直感が云っていた。

この行動は決して間違いではないと。

男は軽々と自身の斬撃を躲すと、袖に隠した刃で構えを取る。

その一連の動作は流れるように流麗で無駄がない。

男は「なんでやねん」と不満そうに口をへの字に曲げながら後ろへ飛んで距離を取った。

英霊でもなければマスターでもない。

そんな男が自分の斬撃を軽々防いだのである。

セイバーの直感が早鐘のように警報を鳴らす。

それに男の動き、戦闘技術は間違いなく英霊と遜色がなかった。

セイバーは自身の直感に従い男に向かって駆けた。

そこで、

「止めろ！ソイツは、平塚は敵じゃないっ!!」

マスターの言葉で動きが止まる。

「マスター、何故止めるのです？それに敵マスターも居るようですし…」

「まさかいきなり戦おうとするとは…」

マスターである衛宮がセイバーを説得する。

こうして殺伐とした英霊召喚が完了したのである。

この世界にドラクエは無い

やれやれ、いきなり斬りかかられた時はどうなることかと思つたよ…。

ていうかオレが一体何をしたってんだ？普通オレじゃなくて遠坂を襲うだろ？

初対面で何もしてないのに美少女から殺意を叩きつけられるとか本気で凹むわ。

セイバーの召喚に成功した衛宮。

彼女に事情を説明し遠坂と同盟を結んだ旨を伝えると、セイバーは納得しマスターである士郎の決定に従う意思を示した。

「それからセイバーから見れば得体が知れないのもわかるけど、平塚は命の恩人なんだ。今日だけでももう二度も命を救われてる……だから」

「分かりました…マスター」

セイバーは無表情で頷くとオレに向き直って口を開く。

「平塚……と言いましたね？マスターの命を救っていただいたことを感謝すると同時に、先程蛮行に及んでしまった事を謝罪します」

「……あ、ああ……まあ、オレも怪我はないし、良いけど……」「しかし」

セイバーは感情の籠もらない目でオレを見つめる。

間違いなく謝罪する態度じゃないな。

「ここから貴方の存在は不要です。命が惜しければ早々に立ち去りなさい。以降、この街から離れ聖杯戦争にはくれぐれも介入しないように」

この美少女は一体何を言ってるんだ？

どうしてここまで悪し様に言われなきやならん。

オレ、何か悪い事したか？

この時はまだセイバー特有の直感など知らないオレはセイバーへの印象が最悪なものになっていく。

それが今後の関を更に悪化させる悪循環に陥ることも今は知る由もない。

思わずオレはセイバーを睨みつけてしまう。

二人の間に険悪な雰囲気漂う。

「ちよ、ちよつと待ちなさい！一体どういうこと？二人共落ち着きなさい」

「いや遠坂、いきなり初対面でここまで悪しげまに言われりや相手が美少女でも普通に

怒らねえ？オレ何か悪い事したか？オレが悪いのか？死ねばいいのか？消えればいいのか？」

「お、おい平塚、何も泣くことねえだろ？」

「泣いてない！泣いてないもんね！」

「いやでも…、涙声になってるだろ」

「涙は流してない」

オレと衛宮のやりとりに遠坂は呆れたように溜息を付いた。

「もう付き合いきれないわね。衛宮君、セイバーも召喚できたんだからそろそろ次に行くわよ」

「あ、ああ…確か教会に行くんだったな？聖杯戦争の運営を取り仕切ってるっていう…」
「ええ、出来れば私も行きたくはないけど、聖杯戦争について詳しい話が聞きたいでしょ？」

そういえば召喚前に話には出ていたな。

隣町の教会に監督役が居る話を。

これからそこに行くのか。

直ぐ側ではマスターと英霊組が話し合いをしている。

何でもセイバーはどういう訳か霊体化できないらしい。

鎧姿は目立つのでせめて武装を何とかしてほしいと言うが、セイバーは敵が何時来るかもしれない状況で武装をとくことを了承しない。

結果、上から何かを羽織る事で鎧を隠すということで落ち着いたようだ。

聖杯戦争か…。確かに興味深い。

出来ればオレも着いて行きたいが…。

チラつとセイバーを見ると、相変わらず無表情な目でこちらを注視している。

無表情だがその瞳の中に明確な敵意が宿っている。

「はいはい、帰ればいいんだろう。帰りますよ…、オレだつて自分から危険な戦いに突っ込む気はねえよーだ」

「え？平塚は帰るのか？」

「仕方ないだろ？セイバーがああの調子だし…それにぶつちやけ聖杯には興味ないし…」

「そっか、平塚が居てくれたら心強かったんだけど…」

「マスター、聞き捨てなりません。マスターを護るのはこの私の役目だ。貴方も用が済めば早々に去りなさい」

取り付く島もない。

「けど途中までは一緒してもいいだろう？道中一緒なんだし」

「分かりました…、くれぐれもおかしな真似はしなように」

「セイバー！」

セイバーは衛宮の咎める声を無視して先を歩き出した。

「まあ待てよ衛宮、オレはもう気にしてないから。あんな小さな娘相手に大人げないし」
そこでセイバーのアホ毛がぴくりと反応する。

「それに、いくら何でもあのダサイ雨合羽姿じや機嫌も悪くなるって…プスーツ（笑）」
「根に持つてるな…」

「ええ、根に持つてるわね…大人げないのはどっちなんだか」

ええい！五月蠅い五月蠅い！コッチは危うく殺されかけた上に謂れのない悪意までも向けられたんだ。

被害者は絶対にコッチ！

（しかしやつぱり凄いな…、剣の英霊か…）

悪態をつきながらも、オレは本心ではセイバーの剣技には感心していた。

力強くも全身の動きを無駄なく剣撃に伝える技量。

放出した魔力の制御能力。

そこから繰り出される暴風の如き一撃。

それに風を纏った不可視の剣。

どれをとつても一級品だった。

本気で殺し合えば無事では済まないだろう。

確かに殺されかけはしたが、凜とした佇まいと騎士然としたセイバーの姿に、オレは心の底から敵意を抱くことは出来なかった。

これがカリスマ性というやつなのだろう。

そんなセイバーの姿が恐ろしくも強い竜の騎士^{デイス}の姿に重なる。

一度は「竜の力で孤独になった」あの娘の姿に…。

(ヤメヤメ、だいたいデイスはおっぱいでかいし、セイバーとは似ても似つかんわ)
暫く歩いた所で道が二つに別れる。

「じゃあオレはここで」

「ああ、平塚…今日は有難う。お陰で助かったよ。必要ないかもしれないが気をつけて帰れよ」

「おう！明日からは一般人として慎ましく過ごさせてもらうさ」

「いや一般人は異世界移動できないし、英霊を退けることも出来ないって」

「それじゃあ平塚君、明日学校で」

こうしてオレは一人寂しく家路に着くのであった。

既に時刻は午後10時を周っており、周囲には人の気配が全くない。

そう、まだこちらの世界は10時。人が寝静まるには早過ぎる時間だ。もしかしてオレ “閉じ込められた” のか？

「……オカシクね？ 全く人の気配がないとか……」

「……へえ？ 気づいちやうんだ」

それは少女の声だった。

道路の先の暗がりから流れてくる無邪気な美声。

幼い子供の声、という割にはしっかりと言葉を操るその声は違和感しか感じない。

オレはアイテムボックスからお気に入りの “雷鳴の剣” を取り出した。

丸腰で勝てる相手じゃない。

現れたのは2メートルを雄に越す巨軀。

鋼色の筋肉鎧に覆われた怪物だ。

無邪気な声の主がコイツじゃないのは間違いない。ていうかコイツの声とか嫌過ぎる。

「本当は、お兄ちゃんとリンを殺す予定だったけど、その前にアナタが死ねば、お兄ちゃんはどうな顔をするのかしら？」

大男の足元から姿を見せたのは白い少女。

この日本には場違いな幻想的な雰囲気を持つ妖精は優雅にスカートの端を持ち上げ

ると、可愛らしくお辞儀をした。

「こんばんは、わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

「これはご丁寧に、オレは平塚剣、気軽にケンちゃんとも呼んでおくれ」

オレは平静を装いながらも挨拶を返す。

コイツはもしかしてピンチというやつではないでしょうか？

何故ならあのデカイのとチンマイのスゲエ殺気ですよ。

殺る気満々ですな。

セイバーと言いい初対面で殺意向けてくるのが続々と出てくるとか、神様そんなにオレが嫌いですか？

以前、夢の中に出てきたキュウベエもどきの光に「契約せよ」と迫られた時「契約書は？」と突っ込んだのが不味かったのか？

グルグルとどうでも良い思考が頭のなかで流れていく。

「うん、それじゃあ殺すね？」

「やっぱり？ そうなるのか？」

「やっちゃえバーサーカー」

瞬間、殺気が一気に膨れ上がった。

効いてないようだが目眩ましにはなりそうだ。

こいつを倒すには高めた闘気と魔力で一気に殺るしか無い。

バーサーカーと打ち合いながらもオレは足を動かさず移動を図る。

結界の中とはいえ、もしも人が巻き込まれたら目も当てられん。

人死にを気にしない戦い方を一度でもしてしまえば、オレはあいつらの仲間も勇者も

名乗る資格がなくなる。

「……ならいいか？」

移動した先は河川敷。

オレは闘いながらも高めた闘気を開放した。

「行くぞー！来たれ！魔界の雷ッ!!」

オレは召喚した黒い雷を雷鳴の剣に纏わせると上空に飛び上がった。

放たれたのは黒い雷光、

^{ジゴス}暗黒雷撃破ッ!!!
^{パーク}

手応え有った!

放たれた極太の黒いレーザーはバチバチと電撃を纏いバーサーカーを飲み込んだ。

オレは地面に着地するとバーサーカーに剣を向けて残心した。

すさまじい破壊の傷跡。

土煙が舞い、割れた地面は未だバチバチと帯電していた。

そして沈黙した巨軀の影。

煙が晴れてくると、そこには上半身が根こそぎ無いバーサーカーの無残な姿があった。

傷口は焼け焦げており出血さえ蒸発している。

「へえ、只者じゃないとは思っていたけど、まさかバーサーカーを殺すなんて…ケン、アナタ本当にニンゲン？」

「ケンちゃんだ。答えはYESだ。それよりもずいぶんと余裕だね？君のサーヴァントは倒れたというのに」

「ふふ、ほんとうに驚いたわ…。でもそれ以上に不思議ね。アナタほどの魔術師なら噂ぐらい聞こえてきてもいい筈なのに…その強さは執行者さえも霞んでしまうわね」

「だったら早々に帰ってくれないか？子供はもう寝る時間だ」

「む、失礼ね。私は立派な淑女レディなのよ？淑女レディに対して無作法な男は一度死んだほうがいいのかしら？」

「君は状況を理解できないほど子供なのか？それとも君自身が戦う気か？このオレと…っ」

その時、イリヤスフィールの口元が三日月のように釣り上がる。

ケン

レベル 99

ゆうしや

☆
・
8

うちゆうヒーロー

さいだいHP : 820

さいだいMP : 660

続く？

ちから：400

みのまもり：210

すばやさ：355

かしこさ：240

うんのよさ：44

もちもの

E：雷鳴の剣

E：がくせいふく

E：しつぷうのバンダナ

E：キーホルダー

いのちのいし

攻撃力：480

防御力：236

特技・呪文

メラ　メラミ

ヒヤド　ヒヤダルコ

ギラ　ベギラマ　ベギラゴン

イオ イオラ

デイン ライデイン ギガデイン ミナデイン

ジゴスパーク メガント ニフラム

ホイミ ベホイミ ベホイム ベホマ ベホマラー ベホマズン

キアリー キアリク シヤナク ザメハ

ザオラル ザオリク

スカラ スクルト

バイキルト バイシオン

ピオラ ピオリム

マジックバリア バーハ フバーハ

マホステ アストロン

ルカニ ルカナン

ラリホー ラリホーマ

ボミオス マヌーサ メダパニ

モシヤス パルプンテ

リレミト ルーラ トペルーラ トヘロス トラマナ

インパス レムオル

火炎斬り　マヒヤド斬り　真空斬り　稲妻斬り　烈破斬り

はやぶさ斬り　メタル斬り　魔神斬り　五月雨斬り

疾風突き　ドラゴン斬り　ゾンビ斬り　剣の舞

ギガスラッシュ　ギガブレイク　アルテマソード

ムーンサルト　飛び膝蹴り　回し蹴り　足払い

急所突き　かまいたち　正拳突き　爆裂拳

しんくうは　石つぶて　じひびき　岩石落とし

すてみ

気合いため　ちからため　受け流し

刃の防御　大防御　かばう　仁王立ち

チーム呼び　ダーマの悟り

E t c :

Level : 6

最強の威力を持つ攻撃とは何であろうか？

プラスとマイナスの魔法力をスパークさせて放つ極大消滅呪文 か？

それとも最強を超えた究極の剣技、アルテマソードか？

いや、竜の騎士が全ての竜闘気を圧縮して放つ竜闘気砲呪文 か…？

いずれにせよオレは、その何れかの内、アルテマソードしか習得できなかった。

そしてアルテマソードは強力だが、それでも最強の技と呼ぶには一歩足りなかったのだ。

補助呪文を用いた後、全闘気を爆発させたスーパーハイテンション状態でさえ、小さな山を吹き飛ばして更地に変える程度だった。

一応、凄まじい破壊力だとは思うのだが仲間はその以上のことをやってのける。

剣技にしろ、呪文にしろ、補助にしろ、その他の事に関しても…。

オレは、どの分野でも最強にも最高にもなれなかったのだ。

しかし、どれか一つでも良かった。

仲間達に胸を張れる誇りが一つ欲しかった。

だからこそ、あんな阿呆な事を…。

この世界にドラクエはない

—狂いなさい、バーサーカー…。

白い妖精の一言で狂戦士のプレツシヤーが増す。

オレがイリヤスフィールに意識が向いている隙に斧剣を回収、既に攻撃の体勢に入っていた。

それからオレは防戦一方になった。

先の暗黒雷撃破（ジゴスバーク）によって高めた闘気を放出してしまい、一気に劣勢に回る。

補助呪文の効果は続いているのだが、状況が不味い事に変わりない。

バーサーカーの謎のパワーアップによって振り出しに戻ってしまった。

いや若干だが脅力においてはバーサーカーが優っていた。

思考が纏まらない。

確かにオレの一撃はバーサーカーの命を刈り取ったはずだ。

現にバーサーカーの上半身は心臓を含めて消滅していたのだ。死んでないなど有り得ない。

オレの疑問にイリヤスフィールが楽しそうに答える。

「いいことを教えてあげる。バーサーカーの宝具はその肉体、嘗て乗り越えた試練と同じ数の命が与えられているの。しかも乗り越えた試練、一度受けた攻撃には耐性が出来て、同じ手段ではバーサーカーを殺すことは出来ないわ。バーサーカーの命は残り九、貴方は残りの手札で私のバーサーカーを殺しきれるかしら？」

バーサーカーの宝具の秘密、イリヤスフィールは有ろうことか自分から暴露したのだ。

九の命ということは許は十二の命を持つていた。

そして乗り越えた試練…。

「まさか、ヘラクレス……、なのか？」

オレの答えにイリヤスフィールは満足気に笑った。

「アハハ！正解！バーサーカーは最強の英霊なのよ！誰もバーサーカーに敵わない！」

このままでは不味い。

確かに手段を選ばなければ、十分に勝機はある。

英霊はマスターの魔力によって現界している。

マスターであるイリヤスフィールさえ殺せばバーサーカーは消える。
しかし、

(あんな小さな子を殺したくないな…出来ればだけど…それに)

出来ればあの巨人に勝利したい。

そんな欲も出てきてしまった。

この世界の人間なら知らない者の方が少ない程の知名度を誇る英雄ヘラクレス。

その伝説が目の前に居るのだ。

ならば、それを打倒してみたくなるのが未知に挑戦する冒険者の道。

それに手がない訳じゃない。

嘗て自分の無力に絶望し、血の滲むような修練とレベル上げの中で編み出した必殺技。

文字通りステータス覧には載っていないオリジナルの必殺技。

それを使う時がやってきたのだ。

ジゴスパークで三度、複数の命を削れたという事は、オーバーキルは有効ということになる。

この技を使うは神龍との戦い以来だ。

あの時は仲間のサポートもあつてか、神龍に止めを刺すに至ったのだが、今回は自身

の力だけでやらなければならない。

「けど、やるしかない」

バーサーカーの猛攻を凌ぎながらも時折、治癒呪文ベホイムで傷を癒やす。

呼吸を乱さないように、無駄な体力を消耗しないように最小限の動きでバーサーカーの攻撃を躲し捌く。

そして体内の闘気を高めてテンションを上げる。

チャンスは一度、そして補助呪文の効果が続いている今しかない。

仕損じれば命がない。

「アハハハ！よく粘るわね！でもそろそろ現界が近いんじゃないかしら」

血塗れのオレの姿をイリヤスフィールが嘲笑う。

しかし治癒呪文の効果と勇者の自己治癒力で無傷に近い。

血塗れの姿のお陰で欺く事が出来ているようだ。

そして時は来た。

閃熱呪文ベギラマ！

まずオレはイリヤスフィールも巻き込むように攻撃呪文を放つ。

紅蓮の炎は波打つようにバーサーカーとイリヤスフィールへ向かう。

「…っ!? バーサーカー!!」

降りしきる小雨を傘で防ぐようにバーサーカーの猛攻を弾き返しながら反撃する。
魔法剣の連続攻撃。

炎の斬撃が、冷気の斬撃が、風の斬撃が、雷の斬撃が次々と繰り出されバーサーカーを後退させていく。

「何をしているの!? バーサーカー!!」

バーサーカーの劣勢にイリヤスフィールは焦ったように声を上げる。

目の前の狂戦士ヘラクレスは確かに強い。

今まで戦った敵の中でも上位に位置するだろう。

しかし最強の敵ではなかった。

間違いなく神龍の方が強かった。

何せ一対多数、仲間と力を合わせて戦っていた時よりも脅威を感じない。

オレの一撃にバーサーカーは体制を崩し踏鞴を踏む。

これで終わりだ!

魔法剣メガンテ…、

暴走し膨れ上がった生命エネルギーを更に制御することで肉体の爆発を抑える。

その膨大なエネルギーを刀身へと込める。

周囲への影響をなるべく避けるために跳躍する。

そして放たれる必殺技、

光闘グランドクロスの十字剣ツ!!!!

一欠片の体力を残したオレは、剣に込められた力を一気に放出した。

斬撃という形で指向性を持った超エネルギーは十字の光線となつてバーサーカーを飲み込んだ。

そして、

ギインツ!!!

なんと雷鳴の剣が砕け散つた!

魔法剣メガンテと光闘グランドクロスの十字剣の威力に耐えられなかったのだろう。

「バーサーカーツ!!!」

イリヤスフィールの悲鳴と同時にオレは膝を付いた。

直ぐに治癒呪文を唱える。

しかし、

「やっぱり直ぐに効果は出ないか…」

実際にオレは傷を負つたわけではない。

生命エネルギーである闘気を限界近くまで放出し、体力が無くなった状態だ。

治癒呪文は傷を癒しても体力までは回復しないらしい…。

HPは間違いなく一桁だな…。

オレはメタな事を考えている自分に苦笑し、バーサーカーの方に集中する。

そこには空気の中に溶けゆく様に消える英雄の姿があった。

狂戦士、そのクラスからは想像できない理性の光を瞳に宿して…。

ヘラクレスが静かな声で語りかける。

—我が生命の全てをたつたの一撃で奪い去るとは、見事という他に言葉がない…

皆が認める大英雄ヘラクレスからの賞賛の言葉。

オレは体力を振り絞って立ち上がる。

最後は勝利者として立っていなければと、そう思ったのだ。

バーサーカーは賞賛するが、オレの技は間違いなく自爆技、出来れば使いたくないのが本音。

魔法剣メガンテからの光闘グランドの十字剣ドククルス

これが俺の切り札であり、オリジナルの必殺技。

ルイーダの酒場で登録されているオレのステータス覧にも載っていない、いや載らない圏外の技術。

他に良い名前が思いつかなかった為、技の名前はパクリしましたが…。

「うそ……、バーサーカー…死んじやったの?」

現実を認められないのか、イリヤスフィールが茫然自失としている。

イリヤスフィールの敗因は多くある。

その迂闊さのお陰で勝利できた。

もしヘラクレスが他のクラス、剣士もしくは弓兵で召喚されていれば更に苦戦していただろう。

ペラペラとバーサーカーの秘密を暴露し、戦場に姿を出した迂闊なマスター。

戦闘能力が低いのもかかわらず戦場に出てきて足手まといとなる。

恐らく何が起きても大丈夫だとバーサーカーの能力を信頼しての事なのだろうが…。

実戦では何が起こるか分からない。

それを理解していなかったこの娘は戦下手だったのだ。

オレは決着を着けるためにイリヤスフィールの前へ移動する。

勿論、最後まで油断する気はない。

「……私を、殺すの?」

感情の籠もらない目でイリヤスフィールがオレを見上げる。

「いやちよつと相談があつて…」

「何よ」

オレは周囲を見渡して溜息を付いた。

「いれ、どうしようよ」

なるべく被害を抑える為に気を使ったが無理でした。

オレとバーサーカーの放った数々の絶技の傷跡。

地面が抉り取られるように破壊され、草木は燃え広がり、極めつけは…。

「やり過ぎた…」

最後にはなつた光闘グランド気の十字剣の傷跡だ。

言葉にするなら底の見えない巨大な十字の穴。

小石を落としてみる。

オレの耳でも石が地面に落ちた音が聞こえない。

地球の裏側まで届いてないよな？

オレは冷や汗を感じながら助けを求めるようにイリヤスフィールを見下ろすのだった。

「知らないわよそんな事」

敵であり、ヘラクレスの敵であったオレへの態度はやっぱり冷たかった。

何でもオレのイリヤに対する評価は口に出していたらしい。

戦下手だの足手まといだのと、どうやらオレは思った事を口に出してしまうらしい。

この癖、治らないかしら…。

取り敢えず、教会に向かった衛宮達に合流したほうが良いかもしれない。

確か、敗退したマスターは教会が保護してくれると遠坂が言っていたし…。

オレはすつと、イリヤスフィールの腕をとった。

当然イリヤスフィールは抵抗の意思を示すが、

「ちよ、ちよつと!?!」「ラリホーマ」

というわけでオレはイリヤスフィールを優しく寝かしつけるとお姫様抱っこ。

どう見ても幼女を誘拐しようとする犯罪者の凶です。

罪状は未成年者略取ですね。情状酌量の余地なしですな。

そしてこの惨状から目を背けて、

「い、いめんなギョーい」

オレは某魔法少女を習ってこの惨状から現実逃避するのだった。

目指すは教会、いや実は教会までの道を知らないから却下。

当然だが自宅には連れて行けん。

家族を巻き込みたくないし、絶対に妙な誤解を受ける。

衛宮は今家は家に居ないだろうし、遠坂の家も分からない。

それ以前に敵のマスターが英霊も失った状態で連れて行けば碌な事にならないだろう。

「仕方がない」

本当は嫌だし出来ればこの場に放置したいが、他のマスターの手にイリヤスフィールが落ちればオレの情報が知られる危険もある。

「……向こうの牢獄にでも入れとくかな？」

アバカムの呪文か専用の鍵もしくは最後の鍵がないと絶対に出入り出来無い場所に閉じ込めておけば安全だ。一瞬本気でそう考えてしまう。

しかし、

「ううん……、バーサーカー……」

イリヤスフィールがオレの腕の中で涙を流した。

どうやらこの娘にとってヘラクレスは唯の使い魔では無かったようだ。

そこには確かに信頼と絆が結ばれていたようだ。

この娘は足手まといではなく、オレが知らない異なる形でヘラクレスを支えていたのかもしれない。

腹は決まった。

—瞬間移動呪文—

オレは異世界にイリヤスフィールドを連れて行く決意をした。

体力もヤバイし、この世界に留まるよりは遥かに安全だ。

そして久しぶりに竜の騎士にも会いたいし。怖いけど…。

オレは途中通り過ぎて行く次元の狭間の中でイリヤスフィールドの涙を指で拭いてやるのだった。

「オレはロリコンじゃないです……って誰に言ってるんだろオレ…」

続く？

おまけ

オリジナル技

魔法剣メガンテ

最強の攻撃力に至れないケンが努力と試行錯誤の末に編み出した技其の一。

マダンテとメガンテをヒントにしており、魔力ではなく生命力を暴走させるメガンテを応用した魔法剣。

暴走した生命力を爆発させずに制御して剣に纏う事で命を落とさずに済む。

HPが高いほど威力が増す最終幻想の究極剣もどき。

光グランドクロス闘気の十字剣

魔劍戦士の必殺技をヒントに編み出した技。

暴走した光の闘気に斬撃という形で指向性を持たせて無駄なく威力を伝える必殺剣。魔法剣メガンテと併用することによって一人では使えない自爆技になってしまう。

二つの技を併用すると並みの剣は耐えられずに碎け散ってしまいます。

続く？

Level : 7

狂戦士ヘラクレスとの死闘後、オレは再び異世界に戻ってきた。

理由は三つ。

一つは安全の確保の為だ。

必殺技の使用により限界ギリギリまで体力を消耗したオレは、回復呪文さえ受け付けない状態にあり、これ以上の戦闘は不可能だった。

二つ目の理由は武具の調達。

アイテムボックスは便利だが、無制限に収納できるわけじゃない。ちゃんと限界がある。

この世界に置いてあるオレの最強装備を手に入れる必要があった。

英霊たちが持つ様々な神秘を秘めた宝具。これに対向する為には現状の装備では不安があった。

そして三つ目は、

この世界にドラクエはない

バーサーカーとの戦いで失った体力もそこそこ回復し、オレはイリヤスフィールと共に、とある場所に訪れていた。

「それで、何時までこんなところに閉じ込めておくつもり？」

オレの前でイリヤスフィールが無機質な声で言った。

雪の妖精の様な雰囲気を持つ少女は、鉄格子の向こう側の殺風景な部屋で静かに佇んでいる。

既にこの世界の事は話しており、魔術が使用出来無い事も立証済みだ。

この世界においてイリヤスフィールは、見た目通りの少女に過ぎず自力での脱出は不可能だろう。

「取り敢えず、聖杯戦争つてのが終わるまでかな……。それまでは不自由かもしれないが大人大しくしてくれ」

オレの言葉にイリヤスフィールは何も答えなかった。

このまま此処にいても仕方がないので、当初の予定通り武器とアイテムを取りに行く。

オレは念の為、牢獄以外の全ての扉の鍵を掛けると、その場を後にした。

迷宮街『パンドラ』

その名の通り迷宮内に作られた巨大な街だ。

世界最大級を誇るパンドラ迷宮。

その地下一七階層は怪物が存在できない破邪の結界層になっており、安全地帯だった。

この街はその結界内に作られた街だった。

そして瞬間移動呪文で入る事は出来ても、同じ手段で出る事が出来ないため脱出も難しい。

人を閉じ込める事にも貴重品を隠す事にも好都合な街だった。

そう、この世界はゲームとは異なり“絶対に安全な”預かり所など存在しない。

アイテムボックスに入りきらない物は自分自身で管理するしか無いのだ。

基本的には貴重品のみアイテムボックスに入れ、それ以外は他の方法で管理する事が常識だ。

しかしオレは二つの世界を行き来する為、貴重な装備や道具は仲間に預けていた。

普段から使わない装備や道具は仲間に使ってもらった方が有益だからだ。

「……に来るのも久しぶりだな」

やって来たのはパンドラの街の北の区画にある宝物庫だ。

この北の区画は出入り口が一つしかなく鍵も特殊な物であり、場所的にも保安市にも都合が良い事も有り区画丸ごと購入した。

その際、結構な数の金塊を換金する羽目になったが……。

仲間が使わない物で、尚且つ強力な武器を保管してあるのもこの場所だ。

分かりやすく説明するなら不思議なダンジョンシリーズでお馴染みの物置倉庫だ。

宝物庫に入ると、カビの匂いが漂う。

長い間放置していた為、埃も溜まっているようだ。

ここは掃除していききたい所だが、時間が無いため目的の物を探す。

オレの記憶が正しければ間違いなくここにある筈だ。

この先、自分から聖杯戦争に首を突っ込む気はないが冬木に住んでいる以上、楽観は

出来ない。

セイバーの言うとおり街を出れば済む話だが、魔術師達の始めた勝手な都合に振り回されるものに喰わない。だからこそ今以上の力が必要になるのだ。

しかし残念ながらオレのレベルは99。

人間としての成長限界に達してしまっており、いわゆるカンストである。

これ以上の戦力アップはやっぱり装備を強化するのが手っ取り早い。

「お……、あつた」

ガチャリと宝箱を開ける。

そこには美しい装飾を施された一振りの剣があつた。

蒼穹のごとく澄み渡った刀身は見る者全てを圧倒する存在感を放っている。

オレの知る限り、この世界最強クラスの剣だろう。

神龍へと至る途中で手に入れた剣である。

優れた錬金の技術によって何度もその形を変え、現在の姿になった最強の剣。

この剣は間違いなくオレの技は勿論、圧倒的な力を持つ竜の騎士の力にも十分に耐えられる代物だ。

オレは次々と宝箱を開き、目的の物を取り出していく。

英霊との戦いに巻き込まれた場合の備えは完璧にしておきたい。

そうして装備を整えたオレは宝物庫にある姿鏡の前に立ってみた。

武器：銀河の剣 攻撃力：180 斬りつけた相手の耐久力を一段階下げる

盾：ウロボロスの盾 防御力：40 魔法を防ぐ結界、マジックシールドの展開が

可能

籠手：アマテラスの籠手 防御力30 最強の守備力を誇る太陽の籠手

頭：審判の兜 防御力：50 状態異常に加え、死の呪文に対しても耐性を持つ神々

の兜

上半身：神話の鎧 防御力：100 HPとMPを自動回復 炎と氷のダメージを軽

減

下半身：絶対のズボン 防御力：30 攻撃呪文と回復呪文の効果が上昇 状態異常

と死の呪文耐性

足：天帝のブーツ 防御力：30 HP自動回復

「うん、完璧だ……」

これぞ対・神龍装備。

それから念の為に命の石も持っていかねば……。

一撃必殺の宝具がまだ有るかもしれないし。

しかし、現代でこんな格好していたら十歩歩く前に職質確定だな。それにどう見てもコスプレだし。

何よりダサイ…。

「脱ぐか」

オレは防具の全てを脱いだ。

しかし、いくら施錠していたとはいえ一箇所これだけの武器を置きっぱなしは矢張り危険だな。

これからはアイテムボックスに仕舞っておこう。

矢張り目立たず尚且つ強力な防具を用意しよう。

最強装備は確実に周囲の眼が無い時と絶体絶命の時だけだな。

そんなわけでオレの装備は、

武器：銀河の剣 隼の剣・改 メタルウイング

防具：疾風のバンドナ しましまTシャツ ブルージーンズ 嵐のブーツ

こんな感じで落ち着いた。

武器さえ見せなければ、現代風に見えなくも…普通になダサイが咎められる事は無いだろう。

取り敢えず上から学生服を羽織っていけば問題ないだろう。

星降る腕輪は：しまった！

隼の剣・改を作るために材料として使ったんだっ…。

もう一つは仲間が持つてる。

英霊相手に星降る腕輪を装備しておけば、間違いなく超スピードで圧倒できた筈なのに…。

無い物強請りしても仕方がないか、せめて回復アイテムを大量に持つて行こう。

世界樹の葉が2　世界樹の雫が1　エルフの飲み薬が5　賢者の聖水が4

集まったのはコレだけか…。

錬金の素材に使ってしまったから、あまり数が集まらなかった。

いまからアイテム收拾している暇もないし、今日はこの辺で帰るかな…。

オレは帰る前にイリヤスフィールに声を掛けようと再び牢獄へと向かった。

牢獄へと続く回廊を抜けて、階段のフロアを通り過ぎる。

イリヤスフィールのいる牢獄は、この二つ先のフロアだ。

この先は衣装部屋で、あまり使わない部屋だ。

しかし、

「あれ？鍵が開いてる…？」

妙に思いつつ部屋に入ると、見覚えのある顔があった。

ソイツはオレの存在に気づきこちらを向く。

腰まで伸びた漆黒の長髪と大きな琥珀の瞳の美少女。

あと相変わらずデコが広い。おっぱいがデカイ…。

あのデコ、いつも光ってるんだよな？剥げなきやいいけど…。

「あ…」「え…？」

お互いの目が合う。

しかし、眼のやり場に困るな。

ソイツは着替え中だったらしく、スカートを上上げる最中だったようだ。

ムツチリとした太腿と柔らかそうな桃尻がこちらに向かって突き出されており、色々

とヤバイ。

何がヤバイかというオレの命が。

「よくわかってるじゃない…辞世の句くらいなら読ませてあげるわ」

どうやら思った事が口に出ていたらしい。

「誰のデコが広いって？あと誰がハゲよ？」

ソイツの広いオデコが眩い光を放ち、紋章が浮かび上がった。

ていうか瞼が腫れてきた所為で視界が、これではおっぱいが見れん。

という訳でベホマを、

—呪文マホトリン封印呪文

「君の考えてる事くらいお見通しだよ。回復は私の気が済んだら死なない程度にして上げるよ」

「ていうかデイス…」

「なに？命乞い？」

「見えてる」

オレはデイスのユツサユツサと揺れるおっぱいを指さして指摘してやる。

「へ？……キヤアアアアアアアアアアッ!? ケンのエッチッ!!!」

「ぬわーっ!!!」

今度は壁にめり込んだ。

この世界にドラクエはない

「占い師？」

「そうよ。占い師ネミア。彼女が教えてくれたのよ。パンドラにいけば君に再開できるって」

「何だ、そのパチモン臭い名前は……」

「パチモン？彼女の腕は本物よ。現にこうして君と再会出来たし」

「いや、何でもない。忘れてくれ」

「こうしてオレは約一年ぶりに竜の騎士デイスと再開したのであった。

「それにしても、考えたわね。神龍への願いが、まさか自由に二つの世界を行き来できるようにしてもらったなんて……」

「いや、それはお前が話を聞いてなかっただけだろ？お前は前から人の話を最後まで聞かないわ、思慮深さも足りないわで、今でも暴走グセが治ってないじゃん」

竜の騎士様はその圧倒的な強さゆえに、物事を力で解決しようとする節が多い。

所謂この娘さんは脳筋なのだ。

「誰が脳筋よ。君にだけは言われたくないわよ」

オレはデイスとのやり取りに懐かしさを感じつつ、イリヤスファイルの居る牢へと移動する。

明日も学校があるし、これ以上この世界に留まる気はないのだ。

「悪いなディース、折角の再会で悪いけど帰らないと」

「へ？ちよ、ちよつと待って！折角会えたのよ？もつとこう……何か言うことは無いの？」

「はて？」

ディースは顔を赤くして頬をふくらませる。

「という訳でイリヤスフィールちゃん。オレは元の世界に帰るけど、君は大人しくしておくんだけぞ？」

オレの言葉にイリヤスフィールは無言で背を向けた。

鉄格子によって出入りを防ぐ窓の隙間から外を見つめている。

付いて来たディースがふとオレの肩を叩く。

「なんだよディー……っひい!？」

「これはどういうことかな？ケン、この子はなに？」

ディースは眉を吊り上げてオレの肩を掴む。

ギリギリと掴まれて骨が軋む。めっちゃ痛い。

フム……。オレはディースとイリヤスフィールを見比べる。

うん、完全に幼女を拉致監禁している犯罪者の凶ですね。

完全に誤解をされている。

時間もないし、ここは簡潔に答えて誤解を解こう。

「どうしてこんな小さな子を牢屋に？この子との関係は？」

「敵、という訳でここから出すなよ。以上」

うん、我ながら分かりやすくして簡潔な説明だ。

「なんだ、そういう事なんだ」

デイスが

ニコリと笑った後、オレとイリヤスフィールを見比べる。

そしてオレは、彼女の額からいきなり放たれた怪光線によって再び壁にめり込んだ。

この娘はやっぱり人の話を聞かない脳筋だった。

薄れ行く意識の中でイリヤスフィールの顔面が物凄く青くなっていた事が印象的だった。

「いや、詳しく話さない君の方が悪いと思うな…」

それから意識を取り戻したオレは、竜の騎士から脅されて、一から説明する羽目になった。

元の世界は、この世界と同じようにファンタジー満載だった事。

そして現在、向こうの魔術師達の大儀式『聖杯戦争』に巻き込まれた事。

イリヤスフィールは、いきなり襲いかかってきた魔術師であった事。

順を追って説明した。

イリヤスフィールは、オレが気絶している間にデイスによって解放され、彼女の膝の上にいた。

何この状況は…。

「ねえデイス、私のサーヴァントにならない？」

「んー？イリヤちゃんみたいなお可愛い子のお願いだったら私、聞いてあげたいなあ」

マジで止めてくれ。

聖杯戦争だけでも面倒なのに、お前にまで来られたら非常に困る。

「言つとくけど、向こうには連れて行かないからな」

「ええ？良いじゃないちよつとくらい。私だつて君の世界に興味あるんだから」

「いやいや、お前が向こうの世界に行けば5分で職質された上に不法入国者扱いで逮捕だからね」

デイスのやつ、本気でついてくるつもりだ。

戦闘では滅多に力を貸さなくせに何かというとオレの行く先についてこようとす

る。

竜の騎士の癖に暇なんだろうか…。

いや、竜の騎士だからこそ暇なんだろう。

「……へんなの」

俺達のやり取りにイリヤスフィールが初めて感情のこもった声を出した。

「デイス」

「なあに？イリヤちゃん」

「デイスは彼の仲間なんでしょう？」

「ええ、腐れ縁みたいなものだけどね」

デイスは照れたように頬をかいた。

「私は、彼を殺そうとしたわ…」

「そうみたいね」

「どうして？どうして仲間を殺そうとした私と普通に話せるの？デイスは私を、殺さないの？」

「……そうね、理由は三つあるわ。一つは未遂に終わってるから、実際にケンは生きてるわね」

「うん」

「そしてもう一つは、照れくさいけどケンを信頼してるからかな？ コイツなら並大抵の事でもうにかなる程ヤワじゃないわ」

「もう一つは？」

「最後に私達は常に死と隣り合わせの“冒険者”だからよ」

そこにどんな理由があろうと自己責任。

冒険という甘美な権利を手にする代わりに死という義務を背負う。

常に死を覚悟し、生を謳歌するのが冒険者なのだ。

「それに死体さえ無事なら死者蘇生呪文^{ザオリック} を使えば済む話だしね」

あつけらかんと言いつつデイスにイリヤスフィールは空いた口が塞がらなかった。

良いことを言った筈なのに結局は死者蘇生呪文^{ザオリック}があるから問題無いというのだ。

何が理由は三つだ。三つ目というか4つ目の理由に全てが集約されてるだけだ。

つまりこの世界は命(笑) に対する価値観がぶっ飛んでいるのだ。

ケンがセイバーに殺されかけた時にそれ程気にしなかったのも結局はそういう事なのだ。

長い間の異世界生活で、すっかりこの世界に染まってしまっただけの事だった。

デイスは聖杯戦争にワクワクしながら、真魔剛竜剣を抜いて素振り始めた。

「フフ、楽しみね。異世界なら少しぐらい羽目をはずしても問題ないわよね！」
竜の騎士が羽目を外す…？

イカン、地獄絵図な未来しか想像できない。

オレは占いなんて出来ないが、今回に限っては100%的中の占いが出来る。

取り敢えずこの世界に置いていけば、二人共自力で世界を越えることは出来ないはず。

となればやるべき事は一つ、

「フフフ、久しぶりに腕がなるわ！イリヤちゃん！よろしくね！」

「ええ…、よろしくデイス」

意気投合して互いに笑い合っている二人に背を向けた。

逃げるしかない。

オレは二人の意識が無いでない内にレムオルを唱えると、地上に向かって走りだすのだった。

「あ、逃げた！」

「待ちなさい！ケン！」

誰が待つか！

オレはピオリムの呪文でスピードを上げる。

オレは二人の静止の言葉を無視して必死に足を動かすのだった。

「クッ！次にこの世界に来た時を覚えてなさい！イリヤちゃんのレベルを上げまくって後悔させてやるから！」

それだけは本気で止めてくれ！

異世界の冒険者はオレ一人で充分なのだ。

ていうか竜の騎士に鍛えられる魔術師とか恐ろしすぎる！

これは早々に聖杯戦争を叩き潰してイリヤスフィールを元の世界に戻さないと…。

オレはデイスから逃走しながら聖杯戦争に本格的に介入する事を決意するのだった。

全てはオレ以外に冒険者を出さないという利己的な理由の為に！

その為に聖杯戦争そのものを叩き潰す！

この時のオレは知る由もなかった。

オレの決意が、聖杯戦争に参加する全ての魔術師と英霊を敵に回す事態に陥る事を。

剣セイバの騎士の逆鱗に触れてしまった事を…。

続く？

おまけ

人物紹介
平塚剣（17）

穂村原学園2年。帰宅部。

元々は大のドラクエ好きのゲーマーだったが、自覚のない神様転生によって型月世界に転生。

黒目黒髪の平凡な容姿でやや太めの眉のお陰か真面目な顔を見ると精悍な顔立ちになる。

しかしムツツリスケベな上に普段はおちゃらけているので常に締りのない顔をしている。

神様特典は異世界へのトリップ。

様々な冒険を経て一流の冒険者に成長する。

その後、ギルド・ドラゴンクエストを立ち上げて神龍を目指す。

異世界の常識や価値観に囚われない奔放な性格で、なんやかやで仲間達からは慕われているようだ。

デイス（19）

伝説の勇者で竜の騎士。

嘗て世界を魔界の闇で染めた災厄をたった一人で打ち倒した生ける伝説。

その後、冒険者として自分の人生を歩もうとしたが、居場所を見つけられずに世界を放浪。

その旅の途中でトリップしてきたケンに出会った。

その後、行動を共にした。

話し方からも第一印象は穏やかな雰囲気的美少女だが…。

実は全ての事を力尽くで解決しようとする悪癖有りの脳筋。

英雄の筈なのに居場所がなかったのはそれが理由かもしれない。

Level : 8

デイスから逃げ出した後、予定通りオレは元の世界に帰還した。

装備も回復アイテムも充実しており、何時襲われても準備は万端だ。

英霊だろうが邪神だろうが魔王だろうが、どつからでも掛かってきやがれ！

聖杯戦争を叩き潰す。

決意を新たに今日も学校に向かう。

悲しいけどオレ学生。

しかしどうしたものか……。聖杯戦争を潰すにしろ具体案がない。

聖杯戦争に参加しているマスターと英霊全てを潰せば良いことだが、知人である遠坂

と衛宮を敵に回すのも気が進まない。

それに遠坂は歴史ある魔術師の一族の娘だ。

聖杯戦争を潰すと知れば間違いない敵に回るだろう。

遠坂といえば今朝、校門で何やら男子生徒と言い争いをしていた様だ……。

あのワカメ頭は遠坂とは真逆の意味で有名人。

間桐慎二だ。ルックスも成績も良く、要領も良いため女子にだけは人気がある。

反比例して大多数の男子には蛇蝎の如く嫌われているが。オレもその一人。今思えばその時の行動が悪かったのか…。

「ごめんなさい間桐君、はつきり言わせてもらうけど、私、貴方には何の興味もないの。だからお断りさせていただくわ」

「な、なんだって…、おまえ何様だよ…遠坂…っ」

ブチ切れ寸前のワカメこと間桐慎二と冷めて目でワカメを見る遠坂。
一触即発である。

正確にはワカメが一方的に遠坂に詰め寄ろうとしているだけだが…。

ここは今後の関係のためにも一つ手助けを。女子には嫌われそうだが…。

そんなわけでオレは、

「ワカメ、撃沈…。流石の間桐も遠坂という壁を超えることは出来なんだか」
聞こえるように言い放つ。

ワカメの意識がコチラへと向く。

物凄い目で此方を睨みつけてくる。

「なんだって…おいお前っ！平塚！いまなんて言った!？」

オレは態とらしく左右の生徒を見てから自分の事かと自身を指さした。

「他に誰が居るんだよお前、そんな事も分かんないわけ!？」

オレは馬鹿にしたように口元を曲げると、

「取り敢えず、そのワカメみたいな前髪を切りそろえてみよう。そうすれば良い返事がもらえるかも」

「ありえませんか。髪型を変えようと何しよう、私が間桐くんとお付き合いですることはありません」

遠坂は、始業のベルが鳴りますよと一言。そのまま優雅に歩き出した。

取り残されたワカメは取り巻きを見回すように睨みする。

ヒステリックな性格をしているワカメに絡まれては敵わないと、生徒たちは目が合う前に退散する。

オレも便乗するように教室へ向かう。

「待てよ平塚」

「なんだよワカメ」

「おまえ、さつきからこの僕を馬鹿にしてるわけ? いつも赤点ギリギリの馬鹿の分際で……」

以前コイツには期末の点数を皆の前で暴露され笑いものにされた事が有った。

両脇に女子を侍らせて意地悪そうに嘲笑うワカメと女子達。

それは今でも苦い思い出としてオレの脳裏に刻まれている。

ずっと異世界にいて勉強できなかったから成績が悪いのは仕方がないだろう…。

賢さ補正のお陰で物覚えは良いが、それでもまだまだ詰め込んでいる最中だ。

冒険者家業もあるし…。

「今その話は関係ないだろ…：フラれた腹いせに過去の事を掘り返すなんて、相変わらず陰険だな」

「ふ、フラれた？この僕が？言つとくが僕はフラれた訳じゃないからな!」

「いや告つて断られたんだろ？世間一般でそういうのをフラれたつて言うんだが…」

「お、おまえ…：「キーーン、コーン、カーン」 チっ、もう予鈴か…：おい平塚!…あれ？」

ここで始業のベルが鳴り、オレはワカメを放おつて教室へと奔つた。

遅刻するとタイガーが怖いからな…。

走れば予鈴が鳴り終わる前に教室の席に座ることが出来る。

オレは皆に気付かれないうちに気配を殺して風景に溶け込むように自然に流れるように教室へ入つた。

ワカメは嘸かし怒り狂つたことだろう。

オレは教室の窓から地団駄踏んでるワカメを見下ろしながら、弁当箱を取り出すの

だった。

「あれ？平塚、早弁か？」

「まあな……」

そしてその日の放課後、

紫銀の長髪が美しいムツチリなボディコンミニスカ美女に襲われました。
なんでやねん。

この世界にドラクエはない

今日の全ての授業が終わった。

その間オレは聖杯戦争対策を夢の中でまで真剣に考えていたが、これといって良い方法とは思いつかなかった。

仕方がないので遠坂と衛宮から何か情報を得られないかと話しかけようとしたのだが、何か妙に仲良くなっていたようで二人の間に入っていけなかった。

しかし痴話喧嘩で攻撃魔術を使うのは、やり過ぎだと思ふんだ。

痴話喧嘩ではないが今度デイスにも言つてやりたい。

聖杯戦争中だというのにセイバーを連れてきていない事で揉めていたようだ。

夫婦喧嘩は犬も食わないと言う事でその場を後にした。

下駄箱で靴を回収、帰ろうとした矢先、

「待てよ平塚」

ワカメこと間桐慎二に声を掛けられた。

はて、コイツから声をかけてくるのは初めてののような気がする。

「珍しいな。お前から話しかけてくるなんて」

「そうか？それよりも話があるんだ。ちよつと付き合い合えよ」

間桐は人懐っこい笑みを浮かべて気軽な態度で言った。

まるで付き合いの長い友人を誘うように。

しかし、その笑みの裏に確かな敵意が滲み出ている。

オレは少し考える素振りをした後、この誘いに乗ることにした。

間桐の後を歩くこと数分。

段々と人気がない場所へと向かい、校舎裏の雑木林の前まできた。

間桐はそのまま雑木林へと足を踏み入れて、一度オレが着いて来ているのを確認して

進む。

まるで罨にかかった獲物を嘲笑う顔だった。

かくいうオレもワカメが背を向けた時、似たような顔をしているが…。

校舎から十分に離れ、立ち並ぶ木々によつて視界が完全に外界と遮断された頃、間桐の足が止まった。

「さあ、この辺でいいだろう」

振り向いた間桐の眼には狂気じみた光が宿っており、まるで犯罪者そのものだった。

「おい平塚、おまえ今朝は随分とこの僕に対して巫山戯た態度を取ってくれたよな」

間桐は大仰な仕草で両手を広げてオレに詰め寄る。

気持ち悪いから寄らないで欲しい。

ていうか今朝？何か有ったっけ？

「はて？何か有ったか？」

まるで覚えていないので聞いてみると、間桐は米神をびくびくと痙攣させて肩を震わ

せた。

「お前ツ！巫山戯るなよっ！この僕に恥をかかせておいてっ！とぼけやがってえっ！」

「……あーいや間桐、恥をかかせたのはオレじゃなくてお前をフツた遠坂だろ？ オレ関係ないじゃん」

「こ、この僕がフラれたっ？ 何を寝ぼけたことを！ 今朝も言ったが勘違いするなよっ！ 僕は振られたわけじゃないっ！ あんなヤツ、コツチからお断りだねっ！」

間桐はワカメのような前髪を振り乱して捲し立てる。

やれ、そもそも僕とは所詮、釣り合わない女だったのさ。

やれ、僕が優しく接したら、遠坂が勘違いして告白されたと思い込んだ。

やれ、僕はあんな女の事なんて何とも思っていない。

「……いや、どう見てもフラれてたよね」

話が延々と続きそうなので、面倒くさくなつてツツコミを入れる。

「ふ、ふん！ この僕がここまで丁寧に説明してやつてるのに……これだから万年赤点の馬鹿は困るんだ」

「赤点じゃない。ギリギリはキープしてる。自慢じゃないけど補習は受けたこと無いぞ」

「ふん、どつちでもいいさ。底辺の奴らの成績なんて」

「いや、成績の話をしたのそつちじゃ」

「もういい！ この際だから単刀直入に言うぞ！」

「なんだよ」

間桐は真つ赤になった顔から一変、人を見下した顔で言った。

コイツの百面相面白いな。

「土下座しろ」

「はあ？」

間桐はニヤニヤと笑いながら制服の下から一冊の分厚い本を取り出した。

それを指で撫でながら言葉を続ける。

「お前、やっぱり馬鹿だな？今朝のことを誠心誠意謝れって言ってるんだよ」

「その誠心誠意ってやつが土下座？」

間桐の取り出した一冊の本。

どうやら唯の本じゃないようだ。

強い魔力を感じる。

「お前ね、本当に馬鹿なの？そんな事は自分で考える事だろう？そんな事も分かんないわけ？」

「少なくとも、お前に謝らなきゃイカン理由は分からんね。これっぽっちも」

「つまり、僕に謝るつもりはないと？」

「だったら？」

「へえ…、いい度胸じゃないか…だったら僕にも考えがあるぞ…」

間桐は本を脇に抱えると叫んだ。

「やれ！ライダー！コイツを傷めつけてやれ！」

それはいきなりの事だった。

オレの背後に気配が現れる。

まるで瞬間移動したかのように。急に現れたのだ。

これが霊体化というやつか。

予測はしていた為、オレは敵、英霊の攻撃を紙一重が躲すことに成功する。

シユンシユンと鋭い風切り音と共に頬の横を鋼の刺が通り過ぎる。

そして間髪入れずに追撃が来た。狙いは左の脇腹、

「…ッ！」

それは間違いなく女性の声。

殺気を感じて躲すと、性別を示すような白く細い五本の指が見えた。

長い髪が揺れる。美しい紫色が雑木林の隙間から射す夕日に照らされる。

オレの視界に入らないように立ちまわる様な動きは、まるで獲物を追い詰める蜘蛛。

どうやらオレを捉えようとしているらしい。

その細腕からは想像もつかない程の怪力。

オレは敵の腕を掴み、一瞬でその力を感じ取った。

しかしオレの力のほうが更に上だった様で、オレは敵の身体を中へと放り投げた。敵は軽やかに宙を舞うと樹の枝へと降り立つ。

「驚きました」

騎乗兵の英 ライダースワント 霊はその姿を表した。

騎乗兵は、涼し気な声音でオレを見下ろす。

瞳を隠す様に真横に巻いた眼帯。

腰より下に伸びる美しい髪。

そして成熟した肢体を包む際どい衣装。

見たところ乗り物には乗っていない。つまり本領は発揮していないと云う事だ。

オレは油断なく相手を見据える。

しかしそれにしても、ええ乳や…。

なあ姉ちゃん、オレとパフ。パフしねえ？そう言いかけて口を紡ぐ。

こういう時の女は冗談が通じん。デイスで経験済だろう？

危うく同じ過ちを犯すところだった。

「貴方は本当に人間ですか？」

やはり騎乗兵から見てもオレという存在は有り得ないのだろう。

間桐も先程の余裕の表情は見る影もなく呆然とした表情で此方を見ている。バトル漫画のキャラが、そのまま現実に飛び出してきた様なものだろう。

我に返った間桐は悔しそうに地団駄を踏んで叫ぶ。

「何やってんだよライダー！速くソイツを殺しちゃえよっ!!」

「殺せつてお前、軽々しく言うなあ…意味分かって言つてんのか？」

「う、五月蠅いっ！どうなつてんだよっ！どうして平塚が、こんな…」

平塚が強いんだ。

そう言おうとして口を閉じた。

今まで見下していた人間が自分など歯牙にもかけない程、強かったなど間桐は認められにのたろう。

オレはため息を付いて、武器を取り出した。

隼の剣・改

羽のように軽く鋭い金属で鍛えられた名剣であり、オレが好んでよく使う一振りだ。オレが剣を装備したのを見て騎乗兵ライダーは警戒するように身構える。

そして間桐はワナワナと肩を震わせると、鬼のような形相で叫んだ。

「お、お前ええええっ!!!お前がっ！お前如きが！平塚の癖に魔術だどっ!!!」

どうやら俺のことを魔術師と勘違いしたらしい。

光が集まるように現れた剣を装備したオレは魔法使いの様に映ったのだろう。だつたらここは煽つてあげましょう。

コイツ見るからに煽り耐性ゼロみたいだからな。

「なんだ？もしかして羨ましいのか？ぼく魔法に憧れてるのってか？中二全開だなあ」
「こ、殺せつ！ライダアアアアッ！！アイツをぶつ殺せえつ！！」

間桐は喉が枯れんばかりの声を振り絞つて叫んだ。

間桐が抱えた本が、怒りの感情に感応するように光を放つ。

騎乗兵ライダーが木々の隙間を縦横無尽に駆けながらコチラへと向かつてくる。

「上等だ。お前らの聖杯戦争はここで終わらせてやる」

オレは自身にバイキルトとピオラを掛けると騎乗兵ライダーに向かって跳んだ。

一瞬で間合いを詰めて目の前まで迫つたオレの姿に騎乗兵ライダーが息を呑んだ。

隼の剣・改ライデインに雷撃魔法を付与、

「遅いつー！」

迎撃しようと釘を構えるが既に遅い。

オレの攻撃の中で最速を誇る「疾風突き」が騎乗兵ライダーの脇を抉つた。

「ラ、ライダーッ!?!」

「悪いがここで消えてもらおうぞ！聖杯戦争なんざ糞食らえつてなっ!!」

好都合なことにコイツは乗り物に騎乗していない。

つまり騎乗兵としての本領を發揮する前ということだ。

冒険者として気にならないわけではないが、今は聖杯戦争を潰す目的で戦っている。つまり狂戦士との戦いのような冒険は無しだ。

実力を發揮する前に潰しておく。

幸いワカメはオレの後ろから喚いているし、巻き込まずに済むだろう。

オレは続けざまに騎乗兵の腹に手を置くと呪文を唱えた。

上級閃熱呪文ツ!!!!

ゴオオオオオオオオオツ!!!!

全てを焼きつくす豪炎が津波のように騎乗兵を飲み込む。

間髪入れずに更に呪文を唱える。

上級雷撃呪文!!

いつのまにか上空に現れた雷雲から紫電が奔り、

ゴゴゴゴゴゴッ!ピカッ!ガガガガガガガガッ!!!!

天空より無数の稲妻が豪雨の様に降り注いだ。

騎乗兵が雑木林と共に焼きつくされ蹂躪されていく。

腕を、足を頭を容赦なく紫電を纏った光線が貫いてく。

「ヒッ?! ヒイイイツ?!」

間桐は腰を抜かしながら後ずさり、這いながらも何とか立ち上がると悲鳴を上げながら逃げていった。

ただ一冊の魔導の本を残して…。

オレがその本を回収しアイテムボックスに仕舞った時だった。

「お、おい慎二!?!…、これは一体…?」

そこに入れ替わるようにやって来たのは正義の味方、衛宮士郎。

走り去っていくワカメとオレを交互に見ると、雑木林(元)があつた更地を見て唸る。

「ちよつとだけ、はしやぎすぎた」

「何処がだ」

「いや、襲つてきたのは向こうだし」

「どういう事だ」

「あー、簡単に説明すると、あのワカメは騎乗兵のマスターで、なんか俺が気に入らんと因縁つけてオレに騎乗兵をけしかけて来た。以上」

「いや簡単すぎるだろう…って慎二がマスター!?!」

衛宮は驚いたように間桐が逃げ去った方を見る。

もう既に間桐の姿はない。

「ていうか、ここに居るのは不味い。そろそろ撤収しない？人が集まってくるぞ」

「分かった。電話でセイバーも呼んであるから、校門で合流しよう」

「令呪使えよ」

「令呪は貴重だからな…、じゃあ話は俺の家でいいか？」

「おう全然OK」

「私も詳しい話が聞きたいわね」

声の方を向くと遠坂と弓兵アーチャーがそこにいた。

また厄介なことになりそうだ。

聖杯戦争を潰そうと決めた以上、遅かれ早かれということか…。

オレは敵意がない事を証明する為に剣を仕舞った。

それからオレたちはセイバーと合流すると衛宮の家へとやって来た。

その時既に学園は大騒ぎとなっており弓兵アーチャーは霊体化、その他はレムオルの呪文によって姿を隠して学園を後にした。

「という訳だ」

衛宮邸の客間の一室にオレたちは集まっていた。

オレは校舎裏の雑木林で起こった事件を包み隠さずに話した。

間桐が騎乗兵のマスターである事。

オレの態度が気に食わなかったという子供っぽい理由で騎乗兵を仕向けてきた事。

そして襲ってきた騎乗兵を返り討ちにした結果、雑木林が更地と化した事。

「やっぱり不味かったか？けど悪いのは襲ってきた間桐だろ？損害賠償は向こうに請求してくれよな？」

「ちよつと黙って」

遠坂は頭痛を抑えるように米神を抑えた。

他の者達も呆れたようにオレを見て溜息を付いている。

けどこれは切実な問題だ。

損害賠償と言われても実際に困るのだ。

冒険者としての蓄えを使えば何とかなるが、コッチの世界で使うと色々問題が出てくる。

その出処とか普通に突っ込まれるだろう。

脱税してるのバレるじゃん。

「とまあ、オレの話はここまでだ」

「でも妙ね」

「何がだ？」

遠坂は得心がいかなように感じた疑問を答えた。

「あの家は、間桐家はもう廃れていて魔術師としての力は無いはずなのに……」

「いやでもアイツは現に……あ、そうだ遠坂、これ分かるか？ワカメが置いていったんだ」

オレは間桐が落としていった本を取り出して遠坂に見せた。

途端に遠坂の顔色が変わった。

「まさか……いやでも……」

遠坂は本をまじまじと観察すると、溜息を付いた。

「まあ分からないことを考えても仕方がないわ。それよりも……、ねえ平塚君」

「何だよ」

「君の強さは充分すぎるほど分かったわ。けどこれは私達魔術師達の戦いよ。これ以上の深入りは命の保証ができないわ」

遠坂は裏の顔、魔術師としての顔でオレをじつと見つめた。

彼女はオレの真意を探ろうとしているのだ。

「オレからも聞いていいか？遠坂と衛宮は聖杯に掛ける願いが有るのか？」
此処が一番重要だ。

聖杯戦争に参加するという事は聖杯が欲しいということだ。

つまり聖杯を使って何をしようというのか？オレが知りたいのはソコだ。

「無いわ。私が聖杯戦争に参加する理由はそこに戦いがあるからよ」

「オレも聖杯なんて欲しくない。前にも言ったけど聖杯戦争の所為で犠牲になる人を救いたいだけだ」

ブレないな衛宮は。

そして遠坂はまるで登山家のようにだな。

アーチャー
弓兵は？

オレが視線をやると赤い弓兵は肩をすくめて言った。

「生憎と聖杯に掛けるような大層な望みは持ちあわせていない」

そして最後にセイバーに視線を向ける。

「貴方には関係ない」

切つて捨てられた。

もうヤダこの娘。

オレこの娘さんと話す度に泣きそう…。

「それなんだけど遠坂、オレはオレなりに聖杯戦争に関わっていいこうと思っている」「つまり、聖杯を手に入れたいって訳？」

「感激に空気が冷めていくのを感じる。」

「セイバーなんかは既に臨戦態勢に入っていた。」

「いやいや逆だって。俺も聖杯なんか要らんよ」

「オレの日常を守るため。」

「そしてもう一つ、気に喰わない事が有る。」

「オレ自身、存在自体が矛盾しているのは分かっているのだが我慢できない事が。」

「つまり私達の同盟に入りたいと？」

「そうしたいけど無理だろうな…」

「どういう事だよ。俺達の目的は同じだろ？ だったら」

「違うよ衛宮、オレの目的は、お前らとは違う」

「オレは未だ敵意を向けているセイバーを見つめて口を開く。」

「なあセイバー、聞いてもいいか？ いや聖杯に掛ける願いを聞きたい訳じゃない？」

「何ですか？」

「お前は、お前達はもう既に死んだ人間、過去の時代もしくは未来の時代に生きた人間だろっ？」

「それが何だというのです？」

「過去にしろ未来にしろ、お前らはお前らの時代を生きて、んで死んで人生を終えた。つまりこの時代には存在しない筈の人間だ」

「つまり君は何が言いたいのかね？」

「じゃあ聖杯戦争で犠牲になった人は、本来なら死ななくても良かった人って事だろう？」

オレの話を皆は無言で耳を傾けている。

この世界は既に無数の死が溢れている。

事故や病気、殺人に寿命。色々な死がある。

それは当たり前の世界の流れで生きている以上避ける事が出来ないものだ。

「けどさ、聖杯戦争は駄目だ。俺の価値観で悪いけど納得いかねえ。だから」

— 聖杯を破壊する —

オレの言葉にセイバーが弾かれたように立ち上がった。

今にも斬りかかってきそうな雰囲気だ。

しかし引く訳にはいかない。

第二の人生を歩んでいる俺の言葉じゃ説得力はないのかもしれない。

しかし少なくともオレは願いの為に他者の意思を無視して自分の事情に巻き込んだり犠牲にしたり、あまつさえ命を奪うなど絶対に納得できる事じゃ無かった。

オレ自身この世界に帰る為に戦ってきたが、一方的に巻き込んだり命を奪ったりはしなかつたし出来なかつた。

「お前ら英霊は確かに偉人だよ。すごい存在だ。伝説になる訳だ。けどさ、お前らの人生はもう終わってんだろう？ そのお前らがこの時代の人達を巻き込んでまで戦争するって本当にそれでいいのか？ お前らは…、少なくともセイバーは英雄なんだろう？」

雰囲気で分かる。

騎士としての風格と凜とした佇まい。

そして真直に正道な剣術。

この娘は誇り高い英雄だ。オレは初対面で分かつたくらいだ。

「その英雄のお前が、無関係な一般人を巻き込むような、そんな聖杯戦争を良しとするのか？」

「黙りなさい！」

セイバーの怒声に呼応するように暴風が逆巻く。

セイバーの深淵なる怒りが逆巻くように剣から解き放たれた風が舞い上がる。

屋敷全体が台風の猛威に晒されたように揺れ動く。

「貴方に私の何が分かるっ!」

オレの言葉はどうやらセイバーには届かなかつたらしい。

竜の尾を踏み、逆鱗に触れたらしい。

衛宮がセイバーを止めようと叫んでいるが、令呪でも使わない限りセイバーは止まらないだろう。

「私は必ず聖杯を獲るっ! その障害は排除するまでだ」

「セ、セイバー!?!」

不可視の剣が黄金の光を放ち、刀身が姿を現してゆく。

今此処に、剣の英霊セイバーの持つ聖剣がその姿を露わにした。

続く？

Level : 9

冒険者、

それは「ルイーダの酒場」において資格を得た者達を指す職業だ。

精霊ルビスの加護を受け、倒した魔物の邪悪な魂を自身の魂に取り込み浄化出来る者。

浄化した力は純粹にして無垢なエネルギーとして魂に蓄積、一定以上蓄積されると魂の殻が破れ霊格が上がる。

所謂レベルアップである。

レベルが上がると能力値が上昇し、呪文や特技を習得する事もある。

冒険者はそうして徐々に強くなっていく。

戦士や武道家のレベルが10も上がれば立派な超人である。

無論、資質や職業など環境や生き方によって能力の成長は人それぞれだが…。

「何よそれ、有り得ないわ…」

ケンがセイバーと相対している頃、イリヤスフィールはデイスから冒険者の説明を聞いていた。

魔術師として異世界の神秘には興味があつた為、デイスの話をも邪魔する事もなく耳に入れていく。

そして次第に話に引き込まれたといったイリヤスフィールの頭には異世界の神秘のデタラメさに、思わず真つ向から否定の言葉を出していた。

魔術師の自分から見ても、この世界の神秘は有り得ない事だ。

そして何よりも自分と同じ世界の住人である平塚剣が、この世界で生き延びるだけでなくレベルアップによつて超人と称しても問題ないほどの存在に成っている事の異常性にしても受け入れられるものではなかった。

「それじゃあイリヤちゃん、ものは試しというし冒険者になつてみる気はない？」

突然のデイスからの誘い、

イリヤスフィールは出された果汁入りジュースに口をつけると、短く溜息を付いた。

デイスはそんなイリヤスフィールの顰方を微笑ましいものを見る目でニコニコと笑っていた。

「気安く呼ばないで。冒険者については興味はあるわ。でも遠慮しておくわ」

「あら、どうして？」

イリヤスフィールは優雅に口元をハンカチで吹くと、ふわりと口元に笑みを浮かべて言った。

「だって、何か嫌な予感がするもの」

冒険者になるということは、何かしらの「契約」によって精霊の加護を得るらしい。

魔術師の観点から見て、もう既に信用ができないのだ。

何せ魔術師の基本は等価交換であるからして。

生来の魔術師としての悪癖というか、性質からか、イリヤスフィールは冒険者になるという事に対するメリットと、有りもしないデメリットを秤にかけて、

その結果、冒険者にはならないという選択をしたのだ。

最も冒険者になることは簡単な事ではない。

ルイーダの酒場が提示する試験をクリアした上で、精霊ルビスに認められる必要があるのだ。

前者は（仮）冒険者、後者が正式な冒険者として、

デメリットといえば冒険者になるまでの試験がそう言えるかもしれないが、それはどんな道にも同じ事が言えるだろう。

そもそも冒険者というシステムは力の弱い人間がモンスターに対向する為に精霊ルビスの恩恵であり、ダーマ神殿での転職も同様だ。

モンスターという脅威が当たり前のよう存在する世界で、対となる存在。いわば人類を守る為のカウンターの一種である。

「やれやれ、振られちゃったか…、イリヤちゃん、素質ありそうだったんだけどな…」
深読みを重ねて冒険者に成ることを拒んだイリヤスフィールの心情を知る由もない
デイスは、残念そうに手元にあるリキユールを煽った。

この世界にドラクエはない

「はあああああつー！」
「ちい」

黄金の剣と白銀の剣が交差する。

衛宮邸の庭で二つの鬨気がぶつかり合う。

片や、冒険者レベル99の勇者、

片や、剣の英霊として召喚された美少女騎士、

互いの意思を通す為に剣を交える二人。

もはや言葉で止められる状況は過ぎ去っていた。

「止める！止めてくれ！セイバー！」

「待ちなさい衛宮君！巻き込まれると挽き肉にされるわよ！」

士郎の必死の叫びもセイバーには届かない。

セイバーは全身から魔力を放出、推進力へ変えて全力で斬撃をケンに叩き込んだ。

砲撃の如き剣戟が次々と繰り出されていく。

ケンは次々と迫るセイバーの剣戟を紙一重で躲し、受け流し、そして弾き返す。

「これは……っ」

本来なら有り得ない攻防。

狂戦士の時といい今回といい、その光景は魔術師である凜には受け入れられないものだ。

英 サーヴァント 霊とは並みのランクの者でさえ、最新鋭の戦闘機と同等の力を持つとされている。

そしてセイバーは最高ランクの英霊と言っても良い。

平塚剣は、そんなセイバーの剣戟を涼しい顔で受け流しているのだ。

しかし何度も魅せられては慣れてくるといふもの。

「アーチャー」

凜は自身の英 サーヴァント 霊へ指示を送る。

このままでは同盟も何も無い。

折角結んだ衛宮士郎との同盟も消えかねない。

令呪を通しての念話は弓アーチャー兵へと向かい、英サヴァントマスター霊は主の命を果たすべく動き出した。

「貴方はここで倒れろ！」

「断る！」

セイバーは怒りの籠った眼光でケンを射抜く。

凄まじい踏み込みから繰り出される一撃をオレは弾き返すと、セイバーの死角へと常
に移動しながら反撃する。セイバーは俺に死角を取られないように見事な体捌きで俺
の身体が正面に為るように立ちまわる。

雷光の様な鋭く速い剣舞に俺は思わず溜息を漏らす。

しかし、

「剣筋に迷い有りだな」

俺はセイバーの剣を掻い潜り懐に潜り込んだ。

眼前からセイバーの吐息が伝わってくる。

ここからは俺のターンだ。

セイバーの呼吸から次の行動は、

「遅いー!」

—瞬間移動呪文—

「ちいつ!」

思った通り。

距離を測る事を目的とした斬撃と同時に後方への跳躍。

セイバーの背後を取った俺は、間髪入れずに剣を振り下ろす。

彼女も振り向きざまに斬撃を叩き込もうと動き出しているが、俺の方が速い。

これで、終わりだ!

アーチャーは眼下で行われるケンとセイバーの戦いを見る。

その剣戟乱舞は見事というしか無いものだ。

両者の美しくも激しい剣戟が交差し火花を散らす。

二人が剣を振るう度に暴風のような剣風と共に、庭の彼方此方に爪跡が刻まれる。

自身の耐久では一撃で致命傷であろう。

セイバーもそうだが、ケンという男も “自身の目的” にとつては邪魔以外の何者でもない。

アーチャーは自身の武装である黒塗りの長弓と矢を構えると、目標へと向けた。

その先はセイバーからケンへと移動する。

そこでアーチャーの動きが止まる。

自身が手を下さずとも、このまま二人で共倒れてくれれば手間が省けるというもの。

それに正面から二人と戦った所で押し切られるのは目に見えている。

ここは残った方を仕留める漁夫の利作戦が望ましい。

そこでアーチャーは皮肉げに笑った。

凜からの念話が届いたのだ。

それは二人の戦いを速く止めるようという催促だった。

「……了解した。マスター」

アーチャー
弓兵はマスターの命令を実行した。

俺の剣がセイバーに届こうとしたその時だった。

鋭い銀線が暴雨の様に降り注いだ。

俺とセイバーは瞬時の斬撃の向きを切り換えて矢の雨を切り落とす。

しかし凄まじいまでの無数の矢雨を全て防ぐ事は難しく、俺達は互いに距離を取って

矢が落ちる範囲から脱出した。

「どういふつもりだ！アーチャー！同盟を反故にする気か」

セイバーは屋敷の屋根の上で弓を構えているアーチャーを睨みつけた。

俺達の間には天の川様に行く手を遮る様に地面に矢が縫い付けられていた。

「違うわよ」

「少し頭を冷やせ。セイバー」

凜は散々な状態になった庭を見渡しながら溜息を付いた。

「戦うにしても時と場所を選びなさい」

此処は魔術師の屋敷とはいえ、一般人も出入りしている。

その上、曲がりなりにも自分たちの拠点なのだ。

成り行きの戦いで破壊して良い場所ではない。

「セイバー、これ以上は…」

士郎は沈痛な面持ちで令呪に触れる。

これ以上やるなら令呪の消費も辞さない。

そんな主の意思を感じ取りセイバーは剣を下ろした。

「……分かりました」

セイバーの光り輝く白銀の剣が風に溶けるように再び、不可視の剣へと戻る。

「ふう、漸く終わりか…ちよいと冷やっとした」

「悪いな。セイバーが突然」

士郎は本当に申し訳無きそうな顔で俺に頭を下げた。

「いや、こういう事は慣れっこだし俺も反撃したしな」

実際、アーチャーの邪魔が入らなければ全力の斬撃を叩き込んでいたところだ。戦いを始めたのはセイバーだが、殺し合いに発展した以上お互い様だ。

「……去りなさい。今回は見逃します」

セイバーは背を向けて歩き出す。

「セイバー、お前、迷っているのか？」

俺の言葉にセイバーは足を止めずに屋敷の中へと姿を消した。

「じゃあ衛宮に遠坂、オレはもう行くよ。さつきも言ったが聖杯は必ず破壊する。出来れば立ち塞がらないでくれよな」

オレは自分の意志を伝えると、衛宮の屋敷を後にした。

衛宮の家を出て帰路につくこと数分。

「やっちまった……」

オレは頭を抱えて蹲った。

何偉そうに説教カマしちやっつてんの俺。

何が剣筋に迷いがあるだ。

中二病じゃねえんだぞっ！

イカン、なんか鬱になってきた。恥ずかしすぎる。

「……帰るか」

セイバー達は完全に敵に回ってしまった。

自分の招いた事とはいえ、キツイものがある。

英^{サーヴァント} 霊という強力な存在と俺は一人で戦わなければならない。

多種多様な力の秘めた宝具という武装。

そして英雄とまで称されるほどの武勇を備えた強敵達。

正直いつて気が重い。いつその事、仲間を連れてくるか？

その危なすぎる考えをすぐに放棄する。

「それで、俺に何のようですか？」

「ほう、貴様が奴の言っていた雑種か…どうやら鈍くはないらしい」

現れた男は黄金^{キンピカ}だった。

頭から足の先まで全身が黄金^{キンピカ}の男。

ソイツは電柱の上から、まるで養豚所の豚を見るように俺を見下していた。

真紅の眼光は月明かりに照らされて怪しく光る。

「英霊つてのはどうしてこう…、中二病が多いんだ」

英霊は高い所から人を見下ろすのが好きなのか…。

男の背後の空間が歪み、無数の刃が顔を出した。

剣、槍、斧、短剣に鈍と随分とバリエーションに富んでいる。

「……雑種、私の所有物^{オンナ}に手を出した事、後悔しながら逝くが良い」

はて？ オレのオンナ？ 何のことやら？

このキンピカは何か誤解しているようだ。

はつきり言つてオレはNTRの趣味はない。

このキンピカは何を訳の分からん事を言つてるのだろうか？

正直付き合いきれん。

ここはスルーする事にしよう。

黄金の男の背後から無数の武器が放たれると同時にオレは呪文を唱えた。

—瞬間移動呪文—

瞬間、オレの身体は光と化し世界の壁を超えた。

オレの眼下には無数の武器が地面に突き刺さっており、キンピカが怒り狂っている光

景が流れるように過ぎ去っていった。

「ていうか誰アレ？」

オレの疑問に答えてくれる者は誰もいなかった。

「それで、おめおめと逃げ帰ってきたの？」

「いやだって、連戦で疲れてたし…」

冒険者としての拠点にはデイスとイリヤスフィールの姿があった。

事の顛末を説明し、黄金の男から逃げてきた事を話すと、我らが竜の騎士様は呆れたように溜息を付いた。

「聖杯を壊す決意表明において、逃げ帰ってくるなんて…」

「こちとら竜の騎士様みたいに頑丈に出来てないからね。消耗した状態で戦い続けるとか無理だし」

「回復すればいいじゃないか。君、色々とアイテム持ってたでしょ」

「そんな状況じゃなかったんだって」

それにあの金色の男は危ない感じがしたし。

「それ、間違いなく、サーヴァント英霊ね」

「それは分かる」

傍観していたイリヤスフィールが口を開いた。

まあこの現代社会であんなに目立つキンピカの甲冑を着ている奴が一般人なわけはないだろう。

「でもソイツ、何者なんだろう…宝具を無数に持つなんて聞いたことないわ」

イリヤスフィールは可愛らしい仕草で考え込んでいる。

「まあ相手が誰であつてもギルド“ドラゴンクエスト”が冒険を前に背を向けるなんて有り得ないでしょ」

「いや、ヤバければ普通に逃げるって。逃げていい状況なら迷わず」

最強の竜の騎士様は無茶苦茶だ。

オレはデイスのお小言を聞き流してベッドに身を投げた。

このベッドには宿屋のベッドと同じく自己治癒力促進呪文ホイと催眠呪文ホーマが掛けられており、安眠と完全回復が約束されている素敵な寝具だ。

目覚めた時には完全回復間違いなし。

デイスの声は、ベッドに掛かった催眠呪文ホーマの力によって打ち消され、オレは夢の世界に旅立っていった。

「じゃあ明日は私も君の世界に行くから」

聞こえない。オレには何も聞こえない。

オレは明日は早くに起きて即効で戻ろうと心に決めるのだった。

続く？